
沈黙のサーバント

瀬田一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

沈黙のサーバント

【Nコード】

N3374W

【作者名】

瀬田 一郎

【あらすじ】

人類の30%が吸血鬼となった世界。人類は家畜として飼いな
らされ、吸血鬼の中でも身分の差が生じている。主人公の佐久間は
世界を牛耳る二つの製薬会社のうち、一つの会社に属するハンター
だった。吸血鬼の細胞に適合出来なかった人間を処理する専門のハ
ンターはひどく虚ろな毎日だった。だが、家族を守るために吸血鬼
であり続けることが出来る方法はたったこれだけしかなかった。

プロローグ

「雨…か」

吸血鬼である佐久間は煙草に火をつけながらアーリー&マーリーを見上げながらそうもらした。

アーリーとマーリーはドーム状の幕の表面を管理している人工操作出来る機械だ。

光に含まれる紫外線を遮断してくれる薄い膜が破れてしまえばたちまちナイトタウンに住む吸血鬼は炎上し、蒸発してしまう。

それならば全てを覆うドームにすればいいと思う人間がいる。

だが、考えて欲しい。光のない世界はひどく凄惨なものだろう？味のしないハンバーガーを頬張るのと同じさ。

「また…ここにきたのか？」

おひとけ

帯解は佐久間の深紅の瞳を左側からジッと見つめていったが、佐久間は振り返らずに好きなんだよと答えた。

アーリーの球体の額の部分についてあるランプがチカチカと点灯し、マーリーと通信する。

求愛しているように見えると言われているのは互いの形が全く異なるからだろう。

アーリーは完全に丸い球体。マーリーは棘がついてあり、流線形のアーモンドのような形をしていた。

「俺も嫌いじゃないぜ」

「そうだろう？薄い膜の奥でも太陽がこんなに近くに見えるんだからな」

「ああ。それは羨ましいと思うこともあるが、人間に戻ろうとは思

えないな」

帯解はそう言って佐久間の隣に不自然にあいてあるスペースに座った。

佐久間はベンチの端に座るのが癖となっていた。

それは昔、犬を飼っていてそいつが図々しく人様の膝に頭を乗せて眠ることを生きがいとしていた老犬がいたからだ。

「そうか？俺は人間に戻るのも悪くないと思うがね」

「太陽の光を浴びられるからか？芝生に寝て風を感じながら過ごすのも映画の中にしか残っていないさ」

「今は逃げられないように人間は一箇所に集められている。自由を奪われ、番号で呼ばれ管理されている…だったかな？」

「教科書ではそうなっているな。実際はどうなのかはわからないが、少なくとも優雅ってわけじゃなさそうだな」

「どうして？」

「優雅ならばお金持ちが人間を捨てるわけないだろう？」

「違うないね」

佐久間は携帯灰皿に煙草を押しつけて、紫煙を吐いた。

舌の感覚もほとんど無い。味もしないが、吸っていると気分がマシになる。

「再生医療の研究がどういうわけか吸血鬼細胞を作ってしまった。それが悲劇の始まりになるのか」

「そう思っているのは現場の人間だけだと思う。凄惨な光景を知っているのは俺らだけだろう？」

「…網羅製薬と心羅製薬の人間は全て知っている」

「話を聞いて知っているのとその目でこの手で感じる現実とは全く別なものさ」

佐久間はこの手を、と言った時、無意識に手をあげていた。
何人の吸血鬼を、何人の人間を殺したのだろうか。その両者とも
言えない異質な生物を何匹殺したのか。

今のこの世界では警察官など存在せず、民間の企業が雇用してい
る警備隊で治安が守られていた。

佐久間と帯解は同じ網羅制約の警備隊だった。

網羅製薬と心羅製薬の大きな違いは一つだけ、再生医療として吸
血鬼細胞を扱っているか、肉体活性化剤として吸血鬼細胞を扱って
いるかだ。

概要は何も変わらない。名目が違うだけで吸血鬼になりたいって
いうクライアントを説得する方法が変わるだけだ。

「それでも俺らは続けるしか道はない」

「わかつている…そんなこと。警備隊へ入ると決めた時から俺は覚
悟はしている」

「いつか…いつか来る日が怖いんだろうな。俺だって怖い」

「そうだろうな」

「もし…もし…そうなった時、佐久間が俺を殺してくれよな」

帯解の言葉に返事をすることなく、無言で煙草を取り出した。
火をつけて紫煙を吐き出す中、帯解は静かに去って行った。
いつもこうだ。

隣には不自然なスペースがあつて、俺は振り向くのを辞める。
そこに誰もいない現実を知ることが怖いんだ。

帯解が失踪したのはそれからちょうど五日してからだった。

網羅製薬関連病院

失踪して七日経つと自動的に免許が失効する。
ライセンス

おひとけうつし
帯解勇次は吸血鬼の細胞との適合検査の時に大量の薬物を自らの肉体へ投与していたことを佐久間は知っていた。

悲しいことに少ないことではない。貧富の差が激しい格差社会で生き残る方法は命のリスクを取るか、血を捧げ続ける家畜となるか。

―今日は六日目の夜。まだ雨は止まないでいた。

佐久間は車から降りて地下スロープを歩いていた。

網羅製薬の関連病院の特別社員用、もつとわかりやすく言えば警備隊ベ―ゼ用の入口が地下にあった。

一般的にはハンターと呼ばれる種族。製薬会社には必ず存在しているのだが、忌み嫌われる存在であるゆえに人の目を避けて生きていた。

その理由の最も大部分をしめるのは身内を殺された人間が多くいるからだろう。

同じ家族。同じ遺伝子でも細胞が拒絶の有無は違った。

妹が拒絶されて兄が適合出来ることもある。

程度の差はあった。妹が拒絶されていてもいくつかの投薬を続けていれば拒絶反応を弱めることが可能で異質な存在になることもない人もいた。

その一人が妹の佐久間陽子だった。

「あ…お兄ちゃん？」

ガラス張りで囲まれた病室をノックすると陽子がニコツとほほ笑んだ。

「わかるのか？」

「うん。お兄ちゃんの叩き方は優しいんだもん」

笑みを大きくする陽子へ触れることは出来ない。

触れてしまえば吸血鬼になったことを知られてしまう。佐久間はガラス越しにしか会話が出来ない。

陽子の病気は神経系の病気らしく、身体を動かすのも難しい。

その大きな瞳からは光が消えて何も見えていないと聞いた時、吸血鬼になろうとさせたのだが本人が拒否したのだった。

佐久間の両親は暴走した吸血鬼に殺された。

小さな時だ。そんなこと憶えていることに驚いたほどに小さな時。私はなりたくない、と言った言葉が今も胸に残っている。それは春を待っている雪のようだった。

「どうしたの？お兄ちゃん」

「…ごめん。ちょっと雨が気になっただけさ」

「本当？」

陽子は神経が鈍くなった代わりに第六感と呼ばれる感覚が優れ始めたと言う話をよくする。

人の思考が何となく伝わってくると言っていた。

嘘ならばそれでいいが、本当ならば――

「嘘を言っても仕方ないだろうっていうのはダメだよな。本当は煙草を吸いたくてそわそわしていたんだ」

「館内は禁煙だし、身体に悪いよ」

「わかってはいるんだけどね。仕事をした後は煙草が無いと調子が出ないっていうか何ていうか」

佐久間は小さく笑った。

目の前に隔てるガラスに映る自分の表情。うまく笑えていないな、と胸中でつぶやく。

「お仕事大変なんだね。私も身体が治ったらウンと働くから待ってね」

「そうだな。身体が治ったら二人で遠くへ引越そうか」

「うん。南の島？とにかくあったかい土地へ行きたいな。波の音がすごい好きなんだ」

「ハハハ。そうだな。俺も寒い土地よりは暖かい土地の方が好きだ」

「じゃあ約束だね。私は早く身体を治すから無駄遣いしちゃダメだよ」

「約束するよ」

ベッドの上で右手の甲をこちらへ向けてあげ小指を立てた。ガラス越しに佐久間も同じポーズをする。

「ふふふ」

ポーズをした途端に陽子が笑う。

その姿を見ると何となく伝わるっていうのが真実なような気がして怖くなる。

網羅製薬関連病院 2

「…どうしたんだ？」

ふいに笑顔が消えた。

陽子はジッと壁面スクリーンの方角を見ていた。

マイクの位置が陽子のベッド付近にあるので雑音程度にしか聞こえないが、どうやらアーリー故障のニュースを聞いているようだった。

「事故のニュースばかり…」

「ああ。アーリーは衛星からの通信を変換するコードがおかしくなっていたって話。メンテナンスだっと思って思えばすぐにおさまるさ」

「そうじゃない」

陽子は小さくそう言った。

「そうじゃなくてあんなカーテンを整備するための機械で大騒ぎするなんて」

「吸血鬼にすれば問題…なんだろうな」

「吸血鬼、吸血鬼、ニュースやテレビやネットは全て吸血鬼を中心に報道している。新人類なんて言い方してさ。優れているとも言いたいばかりッ」

その言葉は佐久間にはきつく響いた。

だが、声色には見せることなく話を続けることに努めた。

「母さんも父さんも死んだんだ。今更嘆いても仕方ないよ」

「わかっているッ！！ケド…ケド…」

何が言いたいのかは第六感が優れていない佐久間でも手に取るようにわかる。

佐久間が目を落とした先にあったのは自分の病的に白い肌と長く伸びた爪だった。

思わず目をそらす佐久間。

背後には医者がいて看護師と何か話している姿が見える。だが、佐久間の視線に気づいて場所を移動した。

行き場のない視線を瞼の裏に閉じ込めて陽子の声を待った。

「ごめんね。お兄ちゃん」

「いいんだ。俺も…こんなことくらいしか出来ないから」

「ごめんね」

「俺こそ、ごめんな」

心からそう謝りたい。

まだ兄だと思ってくれている陽子に嘘をついている。

その嘘の為なら命だって捨てても惜しくない。

妹の中の兄である佐久間との思い出を指でくり抜いて捨てられるのならばそうしたい。

吸血鬼の兄がいるのと孤独な一人身はどちらがいいのだろうか、と考えてしまっていた。

網羅製薬関連病院 3

テレビの話とお世話してくれる看護師、正確には網羅製薬の監視員の人の話を聞くことで面会時間は過ぎる。

佐久間はただうなずいて時間が終わる。

全てが嘘で固められた世界に閉じ込められた陽子の笑顔はひどく悲しいもののように見えた。

「そろそろ」

通路を歩いてきた網羅製薬の社員が佐久間の背後からそう耳打ちする。

「面会時間が終わりだそうだ。また明日来るから…」

「…うん」

声のトーンが一つ落ちて陽子はうなずいた。

病院に来たばかりの時よりかは感情を出すようになった。

今じゃ悲しそうな表情も見せられるようになった。神経系の病気は完治することは難しい。

奇跡が起こったとしても満面の笑みを浮かべることは出来ないだろうと言われている。

怒ることも悲しむことも笑うことも出来るのにそれを表情に出すことが出来ない。

だからこそ声や仕草などが何よりも気になる。

「なあ陽子」

「なに？」

「何か…欲しいものってあるか？」

「どうしたの？急に」

陽子は少し明るい声になった。

「早めの誕生日プレゼントなら先週もらったよ。その前は入院一年記念だって。その前は…なんだっけな」

「面会時間延長記念だよ」

「そうだった。十五分から二十分になったんだよね」

「そう…リハビリをがんばったらもつと話せるようになる」

「うん。頑張る。頑張ってまた一緒に暮らせるようになりたいな」

胸がチクリと痛む。

佐久間は息を飲み、心を静まらせる。嘘は慣れるものではない。

「ああ。一緒に暮らせるようになったら家事は当番制だぞ」

「えーやってくれないの？」

「甘えるんじゃない。だから家事の勉強もしておくことだな」

「はい」

陽子は子供のように毛布の裾を摘んで気の抜けたような口を大きく開いた生返事を返してくる。

それが可愛い子に見せるためだったら安心出来る。

この表情は神経疲労が溜まり失神する可能性もある危険な兆候だと聞いている。

「それじゃあな」

佐久間は踵を返し陽子の病室を後にした。

網羅製薬関連病院 4

陽子の病室は専用個室と呼ばれ、精神病棟と同じく隔離された位置にあった。

網羅製薬の社員の関係者で埋められた病室にはそれぞれの嘘で満ちている。

たとえば、失踪した帯解の弟もこの病院の個室へいる。

佐久間が所属する網羅製薬警備隊レーベの人間の家族が入院していることが多い。

この病棟にいる人間は全てレーベや下請けレベルの社員の関係者だと言っている。

製薬の社員は全て吸血鬼であり、その家族も同じだった。

レーベや下請け社員の中にも家族を吸血鬼に出来た人もいるが、維持や管理する代金を支払えなくなる問題が深刻になっている。

そういう時に解決するのもレーベの仕事だった。

正規の料金を支払えなくて闇ルートで薬品を頼る事件や薬を盗む事件も増えてきている。

だが、仕事はそういう人間を追いこむことではない。

吸血鬼を維持できなくなり、人ならぬ者となった異質な何かを処理することが仕事だった。

一般的に「ヴァーテ」と呼ばれる壊鬼になった吸血鬼の対応として作られたのがレーベだと言われている。

「…」

バイザーの中央のアイカメラの上についてあるランプが点灯する。サイボーグが通路で立っている。

レーベも会社も信用できなくなった吸血鬼用に開発されたサイボ

ーグを見ることも珍しいことではなくなった。

心羅製薬ではレーベの代行をするのも今やサイボーグや対壊鬼人型兵機「ダージュリーガル」へと移行しつつある。

データで管理するか、人質をとって管理するか。

佐久間はサイボーグを横目に通路を歩いた。

エレベータを起動させ、中へと入る。

鉄に囲まれた密室が妙に心地よく感じる。

真っ暗でエンジン音やスロープを流れる車輪の音まで鮮明に聞こえた。

「陽子…」

思わずそうもらした佐久間。

その名前を呼ぶ度に元氣だった頃の思い出が溢れてくる。

吸血鬼に襲われた時、両親は命を失って陽子は肉体の自由を失った。

だったら佐久間は何を失った―

そう考えてしまいそうになった時、エレベータの扉が開いた。

佐久間は地下駐車場に止めてある車へ歩く。

来客用スペースからずいぶん遠くまで歩かされた駐車場の端にレーベ専用駐車場がある。

ご丁寧に監視員が常駐する小さな小屋まで置いてあった。

「カードを」

入出をする時は小屋の前にあるカードへIDを置くことが定められていた。

全てが監視されている気分だ。

佐久間はIDを胸ポケットから取り出してパネルに触れさせた。

認証OKの文字が浮き出る。

佐久間は無言で自らの車、太陽光遮断フィルムを全面に貼ってあるセダンであるエイトネーブルに乗り込んだ。

吸血鬼用に開発された車。

だが、未開発の部分も多くあり日中は車内でもサングラスをかける必要があった。

雨の日はかけなくとも太陽が見ることが出来た。

だからこそ、雨は好きだった。

その目で太陽が見えるから。

その時だけ人間だと思え、陽子に触れられると思うからだ。

「エンジン起動確認終了。目的地を入力してください」

ナビに命令して網羅製薬支社へと向かうことにした。

網羅製薬支社

網羅製薬支社は郊外にあった。
倉庫や廃墟などが並んでいる風景には馴染まないビルが一棟あった。

そのビルの足元は裾みたいに広がって駐車場に影を作っている。
佐久間の車はそこへ置いて外へ出た。
郊外には太陽を遮断するカーテンは存在しないせいで人間がまるでゾンビのような顔をして徘徊している。

「今日で六日目ね」

佐久間はその声で煙草に火をつけようとした手を止めたが、返事はしなかった。

「残り九時間も無いわ」

「…俺の知った話じゃないが」

「あら？冷たいじゃない？相棒なんでしょう？」

「ただ同期ってだけ」

「境遇も似ているし、馬があつたのかしらね」

真つ赤な口紅を塗った女の口角が歪んだ。

名は府内静元製薬会社員の愛人だったとの噂があるのはその美貌

ゆえかもしれない。

豊富な胸も隠すことなく第三ボタンまで外しているのも理由の一つであることは間違いない。

府内は真相を知りたがる男を楽しむように見ている。

だが佐久間は興味も無かった。

この女に好かれたのはそういった理由からだ。

「府内はどうして中へ？」

「自分の会社に通勤して悪いかしら？」

「悪くはないが、こういう風の吹きまわしなんだろうかって腹を探らされる手間を省ける」

「ふふふ。ファンが多いからね私は」

府内は満足げにほほ笑んだ。

その背後には口紅と同じ色をしたスポーツタイプのセダンがあった。

クラシックカーに興味のない佐久間でもその名を知っているほど有名な車だった。

「主任がファンだと思える神経を疑うね」

「昔から言わない？嫌よ嫌よも好きのうちってね」

「俺には見たままに見えるけどね」

「あら偶然ね。私もそう見えるわ」

「どっちだよ」

「さーてね」

上機嫌にサングラスの縁を指でクイツとあげて社内へ歩いていった。

昔の女優みたいにわざと片方のヒールの底を削ってお尻を振って歩く後ろ姿を充分見送ってから佐久間の社内へと向かった。

網羅製薬支社2

織田主任おたがいるグリーンフィングルームには府内がいた。

少数が班となり行動する場合もあるが、ほとんどは一人ないしは二人で処理する決まりとなっていた。

班として行動する時にしかこの部屋は使われない。

慣れない部屋に主任である織田はうろつくと部屋中を動き回っている。

「しつかりしなさいよッ。主任になったんでしょう？」

「ああ…悪いな」

角に置いてあるソファアは府内が置かせたものだった。

ここが専用席だといって班に支給されたお金の大半を使って自身用に改造している。

テレビも冷蔵庫もあり、今度はシャワールームを作らせようとしている計画もあるようだった。

「佐久間も来たんだからこれで後は誰？」

「大和やまとと光陵ひかりりょう。だが、二人はヴァーテの処理に向かっている」

府内は部屋に入ってきた佐久間をちらりと見て織田へ言った。

織田も視線を追いかけて佐久間の顔を見たが、すぐに目をそらして府内へ向き直った。

佐久間はいさつもなく、府内の対角線にあった壁に背中を預けた。

小さな部屋。

半分は府内が占領しているので余計に小さく見えるが、不満は無

かった。

「てつきり新薬投与の実験関連かと思っていたわ」

「…」

「顔に出るのはまずいわね。まあ私には関係ないけどこれ以上班の人間が減って変な奴が入ってくるのは困るわね」

「補充の予定は無い」

織田はきっぱりそう言い切った。

「明日で七日なのか？」

佐久間がそう返した。

一瞬、間を置いてまた補充する気はないと言った。

「だけど後九時間。探そうっていうのかしら？アツチの中を」

府内は両手を広げて訊ねた。

アツチとは日光を遮るために作られた球体の都市の名称。

吸血鬼はアツチから出ることは不可能とされている。

闇ルートで投与する薬を買い続ける方法などの例外を除いてだが、帯解に限っては街の外へ出ることは考えられなかった。

そのことを最も知るのは佐久間自身だ。

陽子を置いて外へ出ることは考えられない。

「そうだ。身柄を拘束することが出来ればライセンスは剥奪されな
い」

「でもタダで済むとは思っていないわよね？」

「ああ」

「チームで代わりに罰を受けるってのなら反対するわ。逃げたいや

「つは逃げればいいのよ」

「お前達には迷惑はかけないつもりだ。主任として責任を取る」
「押しつけられた役職に価値なんてあるのかしら？」

府内の言葉に織田は黙った。

小隊制になったのもまだ実験段階であり、主任という肩書も暫定的なものだった。

班の人間が推挙するという方法も認められたために織田へ押し付けられた経緯がある。

押し付けたのはもちろん、府内だった。

「時間が無い。その話は帯解を確保した後にしよう」

「具体的な方法は？」

「情報ネットワークにアクセスする」

「アーリーは故障している」

「だが、マーリーが生きている。自律型なので片方でも生きていれば問題ない」

「手続きは？」

「もうさつき終えた。そのために社へ来る必要があった。後はお前達のIDを通せばアクセス出来る」

織田はそう言って手続き途中のデータを二人の電子板へ送ったのであった。

網羅製薬支社3

帯解の行動記録は佐久間と会ってから完全に消失している。
クレジット履歴や位置情報の確認も不可能だった。

「ここで何の話をした？」

あの空を見上げていた日の話。

「世間話さ」

このことを予見させる話をしたことを話さなかった。
話せば帯解のことを裏切るような気がして話せなかったといった
方がいい。

「それから何処へ行くっていつていなかったか？」

「いや何も言っていなかった」

「だったら何処へ行ったと思う？」

「俺は病院へ向かった」

「会ったのか？」

「いいや」

短い返答の後に長い沈黙があった。
織田は眉間にしわを寄せて考える。

「病院へ行ったのなら履歴が残らないはずがない。IDを提示する
必要がある」

「ごまかす方法はないのかい？」

「幾つもあるが、患者と会う時にもIDが必要となる」
「遠くで見るくらいなら充分出来ると思うけれどね」
「…それならIDは必要ない」

府内の言葉に織田も納得した風な表情を見せる。

「だが何をしに行った？」

二人に佐久間が訊ねる。

「何って別れを言いに…」
「それだったらIDを使うさ。隠す必要は無い。その後に消えればいいのだから。それに弟を置いて一人だけ消えるなんて考えにくいと思う」

「そうなると病院へはいっていないと？」

「いや病院へは行ったと思う」

「会っていないんだろう？」

「だからさ。会っていないのが不思議だった。あの病院の面会時間は決まっている」

「行っていないからだろう？」

「俺達はどうして吸血鬼になったのかを知らないわけじゃないだろう？面会は必ず行く。何があるうともな」

佐久間はそう言い切った。

織田と府内にはそう言った理由とは別の理由で警備隊レーベに入隊しているのだからないことかもしれない。

心が途切れてしまいそうにならないように、理由を忘れないように、何より明日も生きようと思えるように面会へは行く。

「病院…消えた吸血鬼…病人の弟…雨…」

「雨？」

府内が並べた単語で気になった言葉を抽出して訊ねる織田。

「雨の日は誰だって感傷的になるもんさ。昔を思い出すか、過去を悲観するか、未来を嘆くか」

「衝動的に嫌になって消えたってことか？」

「さあね」

府内が立ちあがった。

「ここにはいないってことだけは確かさ」

佐久間もそう言って部屋を後にした。

府内も同意して部屋を出る。織田はまだわかっていない様子で二人を追いかけたのであった。

網羅製薬関連病院 5

再び病院へ戻った佐久間が車から降りた。

地下駐車場には帯解の車だけでなく、面会時間も終わったこともあり三人以外の車は見当たらなかった。

織田は襟元を正して手袋を外して座席へ投げ入れていた。

「車は…見当たらないな」

織田は佐久間に確認の意味で訊ねた。

その前には府内の車があつて長く細い足だけがすらりと見えてい

る。
「靴は履き替えておけ」

「どうして？靴は嫌いな。ヒールの方が綺麗でしょう？」

「…何かがおかしい」

「おかしい？」

「静か過ぎる」

「面会時間が終わったからでしょう？来客がいなけりゃ静かにもなるわ」

府内はそう言いながらもヒールを脱いで革靴を履いた。

病院へ来ることも少ない府内と織田よりは周囲の感覚がわかる佐久間の言葉を信じるのが生還へ繋がると身をもって知っている。

「…それで中をどう探索つもりだ？」

「弟の病室と肉体活性化剤の保管庫に別れよう。盗まれていたり何か仕込まれていないか確認する」

「だったら佐久間は病室。府内は一緒に保管庫。連絡は無線を使う」

「旧式…だが範囲は病院では充分足りるな」
「ああ。ほらよッ」

織田は車内から無線を二つ取り出して各自に投げた。
三人が一樣に耳にイヤホンと輪郭にそってマイクを調整して繋がるかを確認する。

雑音が気になるのか、府内は舌打ちをした。

「暗号通信で良くない？」

「病院内は管理システム下を通してしか会話出来ないようになって
いる。相手が傍受していたら逃すこととなる」

「それはアツチの中にいたら同じことじゃないのかしらね」

「アツチを管理する政府とのつながりがあるようなやつなら…レー
ベなんか入っていないだろう」

「でも病院の管理システムは民間企業だもんねってここにいること
前提で話がすすんでいるわね。いいのかしら」
「…」

ため息を吐く織田。

言いようのない表情がかたまっている。

「帯解は必ずここへ来る」

佐久間は小さくそう言って病院内へ続くスロープを歩き始めた。

網羅製薬関連病院 6

エレベータの前で佐久間が立ち止まる。
ボタンの光でエレベータの昇降位置がわかる。今は五階から降りてきている。

面会に行くには七階の受付を通る必要があった。

「俺は階段を登って向かう」

「何かいたのか？」

「いいや」

織田にそう言ってエレベータの脇にある階段を選び登る佐久間。
吸血鬼となつてからは急ぐ時は階段を使うようになった。降りる時は飛び降りればいい。

佐久間は階段の側面にある壁を蹴って移動した。
妙な違和感が胸にある。

「エレベータに乗ったか？」

「ああ」

「中から誰かは出てきたか？」

「いいや」

佐久間の問いに事務的に答える織田。
暗いわね、という愚痴を言う府内の声が時折入ってくる。

「誰かと会ったら教えてくれ」

「了解。そっちには誰かいるのか？」

「いいや。階段は無人」

「だろうな。そっちも注意してくれよ」

通信が切れたと同時に七階へ辿りつく。

この受付を通れば面会室へ行けるのだが、今は通行許可が出ないだろう。

佐久間は足を止めた。

Ｌ字型の受付をする机があつてそこには女性型サイボーグが立っている。

ＩＤをかざさなければ会話することも出来ない。

無理に通ろうとすればアラートが院内に鳴り響き、病院警護隊が集まってくる。

「人の気配がまるで無い。ヴァーテが現れたっていう報告は？」

「こつちも誰もいないわよ。ヴァーテがいたら静かってよりもうっさいって感じたと思うけど」

「そうだが…」

「静かつてのもあんたの勘みたいなものでしょう？第一この時間に病院なんて来たことあんの？網羅の社員なら退社時間よ」

「来たことはないが妹の話を聞いている。夜になろうとする時が一番うるさいって」

「ストレスのせいで聞こえる幻聴の可能性もあるし、眠たい時ってすごく神経が尖ったりもするでしょう？それじゃないの？」

「何にしても患者がいるんだ。医者が何処かに常駐しているはずだ」

佐久間は受付の手前にある診療室を一つずつ覗いたが、誰もいない。

「あ…そういえば大和も光陵も新薬の関係で病院にいるんじゃない？」

「それは…」

「もう秘密ってことでもないでしょう？」

「うつん…だが…」

「真面目ね。だったら大和と光陵に連絡を繋いでみましょうよ」

「そうだな」

耳に当てたイヤフォンから二人の会話が聞こえてくる。

佐久間は変わらずこのフロアの部屋を調べているが、人の気配がない。

「応答なし」

「だったらGPS機能は？」

「電源を落としている。電源が生きていたとしてもフロアまではわからない」

「だがこの病院の中にいるのは間違えない。だとすると」

「普段人が入らないエリア。上の階だろうな」

織田の顔は見えないが佐久間の脳裏には真上を見上げた織田の姿が過った。

驚くほど鮮明な映像に足を止めてしまう。

「どうかしたか？」

「いや何でもない」

頭を振って先を急ぐ佐久間。

瞼の裏にはもうすっかり映像は消えてしまっている。あれは一体何だったのか。

「あーもうッ！！ダージュリーガルならサーモグラフィで探すんだろうけど」

「無理を言っなよ。人間なんだ」

「そうね。人間。皮肉なものね」

「何が？」

「あんたはバカね。そしてバカを相手するのもバカで。私はバカじゃないの。わかった？」

「バカって…バカって言ったのかッ」

口論になる二人。

織田と府内はよく言い合いになるがバディ組みとなると自然と組むようになっている。

訓練時代もよく言い合いする声を聞きながら任務をこなしていた。

網羅製薬関連病院7 回想

―回想

とある事件があつた廃ビル群を演習場として使用していた。
心羅と網羅の合同演習に参加していた佐久間と帯解。

「大和ッ！！」

「聞こえてるってーの」

大和がいる方角から爆発音が聞こえたので帯解は生存確認をする。
面倒そうな返答に息がつまりそうな緊張も和らいだ。

「お前は真面目すぎるんだよ」

「心配なんだよッ。相手が人間じゃないからなおさら」

「そうじゃない。人間じゃないからなおさら信用が出来るんだよ」

大和はへへと笑つて通信を切った。

小隊が編成される前。だが、ほとんど互いに知つた仲であつたこともあり連絡は取り合つていた。

帯解は真面目で優し過ぎる。そして内側に溜めこむ性格でこつこつて感情を表に出すことも少ない。

だが、大和と光陵には感情を表に出すことがしばしばある。

二人は血の繋がらない兄妹だつた。

ちようど帯解の弟と似たような年齢。ほんの子供の二人が吸血鬼となつた経緯は詳しくは語りたがらない。

府内がずけずけと質問しても大和がはぐらかす。

「心配している場合じゃない。ダージユは必ずこのビルの中で仕掛けてくる」

「…また勘か？ 案外お前には超能力つてのがあるんじゃないか？」

佐久間は廃墟の階段を登り続けている。

背後を帯解がついて歩いている。

「そうならいんだが… 府内と織田の動きをみる限り隣のビルで階段を登っている。おそらく追われていると思う」

「どうして？」

「通信を聞けばわかる」

「通信？ だってあいつら愚痴ばかり言っているだけだろう？」

「言い合いの程度で敵との距離がわかる」

「なるほど…」

敵が視界に入ると府内の罵声が始まり、姿が消えて気配も消えると織田が言い返し始める。

府内は変わらず罵声を続けるが織田は緊張していると無口になる。それがリーダーよりも正確なので通信をわざと残して耳を傾けているのが佐久間だった。

いつだってあの二人は喧嘩をしている。だがバディを組み続けているのは互いに認め合う部分があるからだ。

二人は特別な力を持っていた。

それは同じ警備隊の中でも異質と思えた。それゆえに近づく人間も少なかった。

はじめて本音で話せる相手を見つけた喜びだね、と大和が言った言葉が印象に残っている。

そう言った大和と光陵も特別だった。

さきほど話した超能力というものがあるとしたら大和と光陵の兄妹の方だろう。

実験的に産み落とされ、施設の中で育った。経歴は一切不明で時折子供とは思えないような表情をするのを憶えている。

網羅製薬関連病院 8

「…これはッ?!」

夢から目が覚めたように佐久間はその驚いた府内の声に現実を思い出した。

病院は寒い。

閉鎖的で閑散とし過ぎている。薄暗くてまた何かを思い出してしまいそうだった。

「佐久間ッ!!こっちに問題あり」

「…どうした?」

「ダージュリーガルが四対…いやもつといるかしら」

「それがどうした? 網羅と心羅は対立していないはずだが…」

「だからこそ厄介なのよ。カメラ送るわ」

佐久間は電子板を取り出して府内から送られてくるデータを確認する。

映っていた室内の様子。

「惨劇…誰が…」

ダージュリーガルの四肢が千切られオイルの海に沈んでいる。何体か識別することは難しい。

「この部屋は薬の部屋か?」

「いいえ。薬を管理する薬剤師長の部屋よ。記録を見せてもらおうと思って」

「その薬剤師長は？」

「わからないわ。オイルの匂いとパーツが散乱しているから識別は難しいわね」

「人影は？」

「織田が薬の在庫を調べるコードを探しているわ。でも何か盗まれていると思ったらアラートが鳴るでしょうけどね」

府内の声色が慎重だった。

<ーッ！！>

まただ…また…また映像が見えた。

府内がハンドガンを片手に室内を見回している姿が見える。

胴体部分を剥がしてその下にも潜んでいないかを確認していた。

「誰もいない」

「…えっ？」

「何でもない。それより警備隊の姿は？」

「見えないわね。止めた様子もない風に見える。何より遺体がないわ」

「遺体がない…か。それは犯人かすでに殺されているか」

「そのどっちかでしょうね」

佐久間はハンドガンのグリップの底で自らの頭を軽く叩いた。

映像が消えて薄暗い廊下が目の前に見えた。

落ち着かない心音と妙に冴えた頭が不均衡だった。

「帯解…では無理だろうな」

「そうね。リーガルをこれだけ瞬時に相手を出来るわけないわ。そうなると団体ね。網羅の関連病院を襲ってくるなんてヒューケしか

考えられないわ」

ヒューケとは財力や権力を持ってても吸血鬼にならなかった人間が設立したと噂される団体だった。

吸血鬼を忌み嫌い、人間解放を目的に活動している。

「ヒューケは吸血鬼嫌いだ。手を組むとは考えられないな」

「だったら別の事件がたまたま今夜起こったとでも言うのかしら？」

「…わからないが、報告と応援を」

「もうやっているわ。すぐに本部から来る。それまでは互いに慎重に動きましー織田ッ！！」

「どうした？」

「叫び声…何かいるわ」

府内の足音が聞こえた。

織田の通信が切れたことに気づいていなかった。マイクで織田に呼びかけても返事はない。

「クソッ」

佐久間も織田の元へ向かおうとした。

その時だった。

また映像が見えた。

「これは…」

その映像が佐久間の足を止めたのであった。

網羅製薬関連病院 9

眠った陽子を抱いている帯解がいた。

振り返る佐久間。だが、受付のサイボーグが正常に起動している段階で人が入れるとは思えない。

「あり得ない」

そうもらした脳裏には府内との通信の時に見えた光景が過った。帯解は陽子をさらおうとしている…？なぜ？どうして？疑問符が浮かんでは混乱は増していく。

「織田ッ！！」

「大丈夫ッ！！マイクが飛んだだけ。今拾った」

「状況はッ？！」

「ヴァーテが中にいる…と言うよりはヴァーテになったレーベか？」

「どういうこと？」

「レーベの服を着ているヴァーテが薬品を喰ってやがる」

織田のマイクからは銃声がした。

府内が走る音とハンドガンで応戦する音が続いた。

「クッ…どうしてこんなことに？」

「レーベの新薬の実験だって言っていたがな」

「だとすればこれは大和と光陵の可能性も…」

「ない。骨格が大人だ」

「でも…奥にもまだいるわ」

「ああ。いったん逃げよう。出口まで援護してくれ」

雑音が続いてヴァーテだと思われるうめき声も聞こえる。
銃声が重なって全ての音が互いに衝突し合って個別の音が判別出
来ない。

「何があつた？おい！！」

佐久間の声に返答はない。

「クソッ！！行くしか―」

佐久間は頭を押さえる。割れそうな痛みにも不協和音のような音が
聞こえる。

やがてそれは人の声となり、佐久間の名を呼んだ。

「誰だッ？！」

佐久間はもがきながらも叫び返した。
薄暗い廊下を見渡しても姿はない。サイボーグが立っているだけ
だ。

サイボーグが呼んだ？まさかと思ったが声の方角は病室の方だっ
た。

「佐久間…佐久間…」

「誰なんだッ！！」

「俺を止めてくれ…」

「―ッ？！」

帯解の声だと気づいた。

佐久間は目を見開いて確信する。陽子を抱いているのはやはり帯

解でその光景は白昼夢なんかではなく、現実ってこと。

「…悪い。俺はそっちへは行けない」

「は？なんて？」

「帯解の場所がわかった」

「はい？なんて？帯解を見たのか？」

織田にそう言って病室へと走り始めた。

網羅製薬関連病院10

「受付の時間は終了いたしております」

「緊急事態だ。IDを照合して本部へ転送と応援を要請する」

佐久間はIDをスキャンさせるためにサイボーグの視線と同じ位置にIDをあげる。

アイから赤外線が射出され、IDのデータを読み込む。

「面会の時間は終了いたしております」

「だからッ！クソッ」

「申し訳ありませんがまた後日出直してください」

サイボーグは嫌に丁寧な言葉で受け答えをしてくる。
あの映像は消えたが、確かな確信は胸に残っている。

「理由は説明出来ないが、中にライセンス失効中の……ってまだかつ
！！」

佐久間は焦りが募る。

ライセンス失効した吸血鬼を追うためならば緊急措置として通ることが出来た。

その許可も得ることが出来た。だが、まだ数時間はレーベの一員として動ける。

「何を迷うことがあるッ」

佐久間は強行突破を決めた。

ヘッドフォンから聞こえる雑音が嫌な予感を突いて破裂してしま
いそうだ。

「後で報告をするから頼むッ！！通してくれ」
「申し訳—」

何度も同じことを言うサイボーグのモニターを鋭く伸びた爪で引
っこ抜く。

オイルに染まったアイを手の中で潰した。

緊急アラームが鳴り、このフロアのシャッターが閉まった。

真っ赤な光に染められる廊下にサイボーグが横に倒れて壊れる音
が響いた。

「悪いな」

佐久間は振り返ることなく陽子の部屋へと走ったのであった。

網羅製薬関連病院 11

部屋はガラス張りなのだが、面会時間以外はガラスが曇って中の様子が確認出来ないようになっていた。

陽子の部屋は奥から二つ目だった。

佐久間は部屋の入口に立った。

「そっちに何かあったのか？アラートがひどくうるさい」

「何でもない」

「何でもないわけないだろう？帯解も見つけたってッ」

佐久間は面倒になり、ヘッドフォンを捨てた。

弾力がある廊下に滑ることなく足元へ落ちた。それが気に入らなくて足で踏みつぶす佐久間。

中から細かな部品が膝辺りまで飛び散った。

「どうかかなりそうだ」

アラートのせいで興奮する自分。吸血鬼になってから感情が抑え切れなくなっていることに戸惑う。

適合出来なくて薬を服用することもあるが、佐久間の場合は珍しく適合し過ぎるのを抑える薬を服用していた。

根っからの殺人鬼だと言われているようだった。

薬を飲まなければ心地よい殺戮衝動が胸に広がっていくと怖くなる。

「IDを照合してください」

「…どうせ無理なんだろうがッ!!」

佐久間は扉を殴り、中央部分をくぼませる。

くの字に折れた扉から少し開いた隙間に指を入れて扉を引きちぎる。

まるでバケモノだ。

陽子が眠っていることは知っていた。映像だけでなく、薬の投与の副作用で朝が来るまで眠ってしまうのだ。

「佐久間か…」

「帯解ッ」

部屋の中で陽子を抱いた帯解が待っていたかのようにその名前を呼んだ。

網羅製薬関連病院12

「どうしてここへ来た？薬品管理室ではヴァーテが暴れているぞ」
「…あれはお前が引き起こしたことなのか？」
「いや違う」

やけに落ち着いた様子の帯解。本当にやつなのか？
あの時、俺を殺してくれといった帯解の顔が思い出せない。

「だが、次のニュースでは俺らのせいになるだろうな」
「俺らのせい？」

帯解は瞬きもせず佐久間を見返してる。
腕の中にいる陽子の呼吸が気になって陽子の顔を見る佐久間に帯解は続けて言った。

「いつまで続けるつもりなんだ？」

「…陽子が生きている限り」

「だろうな。お前は悲しい生き方をしている。哀れだ。こないだまでの自分を見ているようだな」

「何があつたツ？！お前にも弟がいるはずだ」

「弟はもう助けた。この病院にいる全ての子供達を俺は保護するつもりだ」

「保護…？」

「そう保護。ここにいれば人質として生かされるだけだ。外へ出て俺らの組織へ来れば自分の意思で生きることが出来る」

「お前の組織…ヒューケか？」

佐久間はそう訊ねた。

「そうだ」

帯解は間髪をあけずに答えた。

「ヒューケこそ、正義」

「正義か…だが、現実はその曖昧な幻想では過ごせない。ただ一時薬を奪つてもすぐに切れてしまうぞ」

「薬か…吸血鬼で要るために薬が必要ならば吸血鬼を辞めればいい」
「簡単に言っつなッ。そんなこと」

「出来るんだよ。ヒューケの技術は我々が思っているよりも何倍も発達している」

「信じられないな。そうであれば網羅と心羅に対抗する製薬会社を作るはずだ」

「信じる必要は無い。時期がくれば…時間が経てばお前なら必ず答えに辿りつく」

「答え…？」

「その時にまた会おう」

「待てッ！！」

帯解が後方へ軽く跳躍する。

慌てて佐久間は手を伸ばした。

網羅製薬関連病院 13

「辞めてッ」

陽子の声が聞こえた。

耳の奥、頭の奥、それは心の片隅に残っていた記憶の中の声に思えた。

揺さぶられる四肢はぴつたりと張り付けられたように動けなくなる。

ふわりと帯解が着地した。

「この声は…何ッ」

「サイレントヴォイス…やはりこの子にも…」

「何だそれはッ!！」

「心に直接話しかけられる第七感」

「第…七感…？」

「そう第6感でこの世界とは違う異世界のことを感じる。そして第七感で異世界と現代を繋ぐ」

「何を言っている？」

「実験だよ」

「実験？」

「生態実験を行っていたんだ。吸血鬼とは肉体の進化。そして第七感を開くのは精神の進化」

「進化？それは一体ッ」

「…すまない佐久間。俺は全てを知らない」

帯解は本当に申し訳なさそうな顔をして目を伏せた。

視線が陽子のへそ辺りに落ちて顔を歪ませる。歯がゆい気持ちを

感じている様子に戸惑う佐久間。

「だったら教えてくれ」

「…」

「俺はどうすればいい？」

「…」

「お前を切り刻んで陽子を取り戻せばいいのか。お前を逃してヒューケを連れて行けば陽子は救われるのか」

「…後者だ」

帯解はたつぷりと間を置いてそう答えた。

「それを信じろと言うのか？」

「ああ。それが真実だからな」

「確信が持てない。それならば俺も一緒に連れて行け」

「それは出来ない」

「どうしてッ?!」

「…」

「だったら陽子を置いていけ」

佐久間は爪を立て、そう言った。

「無理だ」

「だったら―」

佐久間が地面を蹴り、陽子を抱えた帯解へ襲いかかろうとした時、部屋の中にいたもう一人の存在に気付いた。

それは天井から佐久間目がけて一直線に飛びかかってきた。

細い四肢。腹だけが異様に膨れて栄養が足りない子供のような姿をしている。両掌を頭の上で重ねて、長い爪をドリルのようにひね

っていた。

佐久間は避けきれずに肩を挟まれた。

「ヴァーテ。苦しみ絶望する異形が存在」

帯解は小さくそうもらしてから右手を背後の壁へと押しつける。
掌から真つ暗な闇が現れて波紋を描くように円を押し広げていく。
やがて人が充分に通れるほどのサイズになった。

「待てッ」

その闇の門をくぐろうとする帯解を追いかけようとする佐久間へ
ヴァーテはもう一度、攻撃を仕掛ける。

爪の威力が強すぎて弾くことも難しい。佐久間はさっと避けて再
び門へ手を伸ばしたが、届かなかった。

門は閉じて陽子と帯解を飲み込んだのであった。

網羅製薬関連病院14

ヴァーテは部屋中を飛び回っている。

影から影へと姿を消してまた影から現れて佐久間へ襲いかかる。
佐久間は反撃の隙を窺っているが、避け続けるだけで手いっぱいだった。

「どうしてヴァーテがこんなところに？それにヴァーテがどうやって中へ入った？」

ヴァーテの爪がスーツの裾を切り裂いた。

黒い紙きれが宙に舞う中、佐久間の足音だけが室内に響いた。

「帯解も…どうやって中へ？あのゲートは何だ？」

「たったッ」

「何？喋ったのかッ？！」

何か言おうとするヴァーテ。姿は見えないが、うめくような声だけが影を移動している。

「クッ」

そのおかげで佐久間に飛びかかってくる前から位置がわかる。
だが、ドリルのような爪を止める手立てはない。手持ちの武器はハンドガンだけ。残るは自らの爪と牙。

「くらってくれよッ」

佐久間はハンドガンを片手に声の聞こえる方角へ銃を撃ち続けた。足元に転がる薬莢。銃声。跳弾して室内を暴れ回る弾。全てがせわしく入り乱れていた。

「た、たッ」

影からボトリ、と何かが落ちた。

転がり続けていた薬莢がヴァーテの崩れ落ちた身体に触れて止まった。

佐久間は倒れるヴァーテの頭を踏んだ。

「何処から入ってきた？」

「た、たッ」

「そしていつからいた？お前は帯解の仲間か？」

「たっ、た」

「舌を噛むなよ。お前には聞きたいことがまだまだあるんだからな」

かかとをヴァーテの開いた口元にねじ込んで佐久間は冷酷な口調で言った。

冷たい床と違ってこいつは生温かい。

「ッ。ッ」

「話せないならうなずいて答える。さもなければこいつでお前の四肢を撃ちぬく」

「ッ。クツエ」

パンパン、

銃声が二つ鳴る。

ヴァーテの膝の裏に一つ。もう一つは長い爪の中央部分に一発。

爪は割れて血の池へ沈む。

ドクドクと流れ続ける血。もう踏んだ足をどうにかする気力さえも無い。

「最後の質問だ。よく考えて答えろ」

佐久間は足を退ける。

代わりにハンドガンの銃口を口の中へと押し込んだ。

その銃口を奥歯でギリギリと噛むヴァーテ。

「どうしてここへいる？」

「た、た、たすけー」

パン、と甲高い銃声が言葉尻を奪った。

帯解が助けて、と言ったのではなくヴァーテが助けを求めている？だが、確かに帯解の声で佐久間の名を呼んだ。

勘違い…意識の混同…考えられるのは無限にある。

ヴァーテは本来、混乱して暴れ続ける。痛みに、体内にある別の存在に、拒否する代わりに暴れるものだった。

「助けて、か」

佐久間は最後に言おうとした台詞を口に出して言った。

ヴァーテは錯乱していて会話することさえ不可能だとわかっていった。しかし、こいつは話せるような気がしていた。

理由を話せば抽象的になりすぎる。瞳に光があったとか表情が残っていたとか。

確信は無い。

佐久間は誰もいなくなった部屋で立ち尽くしていた。

「帯解はどうやって入った？」

室内を見渡しても入口は一つしかなく、その入口へ行くにはサイボーグを通らなければならない。

もしも通れたとしてもID照合しなければ開かない扉があった。壊された後は無かった。

くの字に中央がくぼんだ扉を見おろして思い返す。ひどく曖昧で虚ろな記憶だが間違いは無い。

「我々のせいにされる？ヒューケのせいに？」

会話も断片でしか思い出せない。

それが真実だとすれば網羅製薬側が招いたことになる。

だが、そうだとすればヴァーテがここへ来た理由も考えられる。

ヴァーテは陽子を殺す為に潜んでいたのだろう。

それに気づいていた陽子が帯解を呼んだ？

つじつまを合わせようとしているだけに過ぎない推測を重ねても

答えは出なかった。

佐久間は廊下へ出た。

「静かだ。やはり網羅が招いたのか？だとすればヒューケの人間が院内にまだいる？」

アラートも鳴り止んで人の気配もない廊下。

「こっちかッ！！」

「違うわ」

「だとすればッ」

「下手クソね。逆でしょうッ使えないわね！！」

織田と府内の声がかすかに聞こえた。

足元の壊れたイヤフォンと配線がむき出しになったマイクを拾い上げる佐久間。

ザザザ、というノイズに紛れて声がする。

何かと交戦中だということがわかる。

「確かレーベの服を着たヴァーテだと言っていたな」

同時に帯解の言葉も思い出す。

俺らのせいにされるだろう、と。そうならば服を着ているのはヒ

ユーケの制服のはずだ。

また別の事件なのか？偶然か、はたまたこれも何か理由があるのか。

嘘と真実が境界線を越えて交わっていく。

頭の中にある事実を整理しようと佐久間は思っ
て織田と府内のい
る薬品管理室へと向かった。

網羅製薬関連病院 16

扉から入ろうとする佐久間に四つの銃口が向いた。

「何だあんたか」

大和が不機嫌そうに銃をおろした。

足元には何とも言えない光景が広がっている。
見慣れた光景だと言っても目を背けたくない。

「何かあったのか？無線は途中で途切れたし」

「ああ。帯解が現れた」

「帯解が？それでやつは？」

「何人かの人間を連れ去って消えた」

「消えた？わかるように説明してくれ」

織田は血を大量に含んだレーベの服を血の海から引き揚げる。

ロゴや認識番号が読めるかを確認するが、手掛かりがないようで
薬品棚に乱雑に置いてはまたヴァーテが着ていた服を拾い上げる。

「話せるほどまとまっていない。だから俺もここへ来た」

「…と言うことは逃げられたのね？」

「ああ。闇色のゲートを開いてその中に…その中に陽子を抱いて消えた」

「妹さんね？」

「ああ…妹だけでなく多くの患者を連れて行ったと言っていた」

「ふーん。それにしても冷静ね」

「…」

「もつと慌てふためくかと思っていたけど」

府内はデスクの上へ座り足を組みながら話している。ぶらんと垂らした二つの細い足を交差させて退屈そうに織田の作業を眺めている。

「新薬…第七感への移行が確認されたモデルだけが消える」

「第七感…確かにそう言っていたが？光陵？」

「…」

光陵はそれ以来何も返事することなくうつむいてしまった。

部屋の角にもたれかかって爪を噛んでいる。

「こつちの情報も出さず。この服を着ているのは同じレーベの人間。新薬を飲んだ途端にこうなっちまってまあ…研究員や医者なんてのはすぐに消えちまったけどな」

「大和達は平気なのか？」

「まあな。飲んでないってのもあるけど」

「運が良かったんだな」

「違うぜ。光陵が最後に回してくれて言ったから逃れられた。その噂の第七感つてのがあるのかもな」

「たとえば…人の脳に直接話しかけられるとかか？」

「さあ？」

大和は肩をすくめてわからないと言った。

佐久間は光陵へ聞こうとして視線を送ったが、大和が自然に二人の間に割って入った。

「帯解がヒューケを自らの所属する組織と言った。この件もヒューケのせいにするために網羅が仕組んだと言っていた」

「何のためにそんなことするのかしらね？」

「それを聞こうとした時、ヴァーテに襲われた」

「ヴァーテが？それはレーベの服を着ていたの？」

「いいや」

「だったら…何処から入ってきたのかしらね？」

「わからない。入口には俺が壊すまでサイボーグが立っていた」

「その帯解みたいに闇色のゲートをくぐってきたのかしら？」

「もしくは網羅の職員が放った」

「帯解を捕まえるために？それともバレたくない何かを消す為かしらね？」

府内はハンドガンの弾数を確認しながら訊ねた。

グリップを真つ赤に変えて銃身を白銀にしている特注品。フレームが純金ではなく金メッキなのが気に入らないとよく口にしていた。

「後者だろうな」

「だと思っから佐久間も妹を帯解に任せて応戦したんでしょね」

「帯解なら悪いようにはならないさ」

「帯解ならね…私なら任せなかったわね」

「それはどっちの意味だ？」

「私が帯解の立場って意味と私が佐久間の立場って意味の両方」

「…自分のチーム全員なら誰がどうあろうと信じてるよ」

府内の言葉に織田がそうきっぱり答えると府内はつまらなさそうな表情をした。

網羅製薬関連病院 17

「何も残っていないだろう。後は鑑識を待つ」

「それでどうするつもり？」

「さあ… 応援を待つ」

「ここじゃないところでって言うてくれると喜んで従うわ」
「外へ出ようか」

室内から洩れた大量の血が通路に扇状へ広がっている。

府内は血を踏まないように机を蹴って扉に掴まり、腕を中心に自分の身体を通路へ投げ出した。

綺麗な着地に満足そうに微笑むのを横目に織田と佐久間が通路を出た。

「まだ… 何かいるのかな？」

「おっと口調がリーダーっぽくないぜ」

「いや… まあ… うん」

「無理する必要ないけどその喋り方治せよ」

「悪いな」

「頼むぜリーダー」

弱気になりそうな織田の背中を押して大和も通路へ出る。その背後を寄り添うように光陵がいた。

「もしも帯解が言ったようにこれが仕組まれたことだとすれば応援を呼んでも来ると思うか？」

「来ないと思う。それでも網羅の病院でこれだけのことがあれば出勤せざるを得ないさ」

「そうだといいがな」

「…？」

「アーリーが故障しているのも偶然でないなら…悪いことになりそうだ」

佐久間の言葉に織田はふいに天井にあるカメラを見上げる。

「生き証人がいれば大変ね。それが万が一、ヒューケに寝返ってその証拠を世界に流されてしまったら網羅は世論から強いバッシングを受ける」

「証言なんてものに信憑性は無いだろうな。あつたとしてももみ消せるだけの力はある」

「他人事みたいに言うけど怖い話ね」

「だからこそ信用出来ることもあるってこと」

「たとえば？」

「何もかも…俺らがついた嘘を真実にしてくれる」

「逆もまたしかりってことで今の状況だとすごい嫌な発言に聞こえるわね」

「悪いな」

「謝られると余計にむかつくわ」

ゆっくりと立ち上がり織田に軽口を叩く府内。

「ーッ！！」

銃声がした。

「他に誰がいるようね」

「ああ。判断がつかない以上行くしかない」

「黙ってついてこいって言えばリーダーらしく見えるんじゃない？」

「ああそうだな。悪い」

その返事にため息を吐く府内だった。

銃声がしたフロアへ向かった。

音は一発じゃなく、複数発。それも同じ銃声でなく複数の銃が使われている。だが、撃ちあっているようには聞こえない。

「ヴァーテが大量にいるようだな」

「防衛ラインを作って近づけないようにって線が濃厚だぜ」

「このフロアは仮眠室と…NICUか」

佐久間は廊下に書かれた表記に眉をひそめた。

NICUとは新生児特定集中治療室のことで産まれたばかりの新生児がたくさんいる。

「知っていて置き去りにしたのね」

「…」

「新生児が全員無事なんて急に襲ってこられたって言うのに疑いがもたれるわ。新生児が殺されれば世論も味方してくれる」

「…赤ん坊は口を封じる必要がないだろうしな」

佐久間は府内に棘のある言い方で返した。

この話は辞めておこうと思ったのは光陵がこの手の話をやけに嫌がるからだった。

動物と子供が傷つけられる話はたとえ童話や作り物の話でも嫌悪感を露わにする姿を全員が知っていた。

府内は普段ならば皮肉の一つでも言うが、今回は大人しく引き下がってくれた。

「だが守っているのなら誰が残っているのだろうか」

「この守りはダージュリーガルが行っているはずだ」

「記憶は消せる…か。アーリーの故障が終わりデータ更新が行われる時に網羅社にある各個体も点検される」

「初耳だ」

「まだ確定情報じゃないから電子板にも乗っていないよ」

織田はそう言って自らの電子板にしかない情報を再確認し始めた。クモの巣へ飛び込んでしまったみたいにもがけばもがくほど絶望がある。

佐久間達は蝶なんかじゃなく、招かれていない葉が勝手に絡まつただけだろう。

だとすれば蝶は一体…？やはり帯解の言ったようにヒューケと交戦に入る布石なのか？

「今は助けることを専念しましょう」

銃声が止んだ通路から聞こえてきたのは赤ん坊の泣き声だった。扉の一部が壊されたか、もしくは外部スピーカーのスイッチが入ってしまったのか。

最後尾の光陵は顔を伏せる。それを振り返りちらりと覗いた大和と目が合った。

今はそんな話をしている場合じゃない。今すべきことなのは目の前の子どもを助けること。

「いたッ！！」

回廊を何度も曲がった奥にヴァーテの背中が見えた。

大柄なヴァーテで背を丸めても天井に擦れている。大きく長い両腕をだらりと地面に引きずって迫っていた。

「一匹か？」

「足元に二匹…いや四匹？」

先頭を走る佐久間に織田が訊ねる。

ヴァーテの股の間から数匹の小さなヴァーテが確認出来る。

それらは扉を盾にして籠城しているダージュリーガルの銃に阻まれてじりじりと後退していた。

「どうする？」

「あれだけの銃弾を浴びてまだ立っているのならば倒すのは難しいかもしれない」

「だが、あの図体のでかいやつの際間をぬって銃弾をかわして赤ん坊だけを回収することなんて…」

「無理だ。それならば二手に分かれて罔になるもの。隠れてやり過ぎし中の赤ん坊を助ける班へ分けよう」

織田は冷静にそう言った。

「バカね。こんなもんは倒すしかないのよ」

そう言って府内が特殊弾を入れたハンドガンのトリガーを引いた。

網羅製薬関連病院 19

府内の放った銃弾は巨大なヴァーテの背中にめり込んだ。

皮膚を引きちぎろうとする音が聞こえ、ジュツと皮膚や肉の焦げた嫌な匂いがある煙があがった。

ゆっくりと内部にある銃弾を押し出す贅肉。

からん、と薬莢が地面へと転がると同時に巨大なヴァーテは動きを止めた。

「デカイのはあんたに任せるわ」

府内はそう言っただけで窓へと踵を返した。

「大和も光陵も外へ」

「何をするんだ？」

「ショートカットよ」

数歩で窓の目の前に辿りつき、もう数秒で窓の縁を掌で押した。

窓にハマっていたガラスは全て割れて落下していく。ちょうど大和が一人通れる大きさの出入り口になったでしょう、と府内がほほ笑むと同時にそのガラスが無くなった窓へと身を投げ出す。

身体をひねって窓のすぐ下の壁に着地する。長い髪が強風にあおられている。

「先に行くわ。ついて来られる？」

「余裕で」

大和は光陵の手をとって窓の外へ飛んだ。

勢いをつき過ぎた大和が体勢を崩しかけて慌てるその手を府内が掴んだ。

「奥の部屋よ」

そう言つて二人を奥のNICUの方角へ腕の力だけで投げた。

「あいよ」

大和はそれを楽しむようにしっかりと光陵の手を掴んで空を滑る。まるで飛んでいるみたいな無茶苦茶な光景に織田は顔をしかめる。廊下にいる佐久間と織田からは大和と光陵が見えなくなった。

壁で屈んだままになっている府内がようやく動く気配を見せた。

「OK・着いたわ。それじゃ頼んだわ」

「いつも府内は危険すぎる選択をする」

「そうかしら？リスクは低いわ。少なくともあのバカデカイヴァーテと戦うよりは院外の壁を走った方がね」

「無茶苦茶だ」

「どうせもらった命よ。失っても悔いは無いわ。それじゃ後で合流しましょう」

府内が壁を蹴る音がした。

長い髪が風に流されている姿が少しだけ見えていた。

「確かに心配している場合でもないな」

佐久間は府内達を見送った視線を廊下に戻した時に見えた光景にそう嘆いた。

ヴァーテは顔を自らのお腹に埋めて背骨の隙間からヌツと顔を覗

かせてニヤツと笑った。

筋肉や皮膚、もしかすると細胞レベルで再構築されたと思われた。ベタツと通路に平たくなる身体。

頭だけが浮かんでいる不気味な生物から筋肉の軋む音や皮膚が伸びる音、骨が割れる音、自らを破壊するそれらの音が不協和音のように廊下に響いた。

「胴長の猫？犬か？」

「どっちでもいいが、背中を擦らないで動けるってのは想定していなかったな」

「ああ…来るぞッ」

織田は膝をかがめて後方へ跳躍しようとした。
だが、

「わおおおおおおおお」

咆哮をするヴァーテ。

足元が揺れてうまく飛べない。膝をグツと沈めて振動に耐える織田。

「まずいッ」

「避けるー!!」

二人が動けない視界に迫ってくるのはあの巨大なヴァーテだった。

網羅製薬関連病院20

体当たりしてくるヴァーテを交差させた腕で受け止める佐久間。

「走れッ！！織田」

織田はその言葉に反応して弾けるように後方へ跳躍した。

佐久間も身体の衝撃をわざと逃して後方へ吹き飛ぶ。宙でくるりと一回転して体勢を整える。

ヴァーテの勢いは止まらないが、こちらへ注意を寄せることには成功したようだった。

「速いな」

「思ったよりもずいぶん速い」

四足歩行のヴァーテは地を這うように後ろ向きに跳ね続ける二人を追いかけてくる。

時折、大きな口を広げて牙をむき出し威嚇するヴァーテ。よだれが床にこぼれて後ろ足を滑らせるお陰で次第に距離は離せている。

「背後に階段がある」

「見える」

「俺は下へ佐久間は上へ行け」

「ああ」

階段の前にあった廊下を蹴り、佐久間は上へ織田は下へ向かった。佐久間は後方を確認しながら階段を二つ飛ばしで駆けのぼる。ヴァーテの前足が見える。

昔にもこういった作戦があった。

その時はいつも何故か佐久間の方へヴァーテが来たものだった。全てがコマ送りに見える。

胸が弾け飛びそうにドクドク言っている。慣れたとは言え、ヴァーテと対峙するのは恐怖を感じる。

こんなにも大型なヴァーテなら尚更。

前足から額。頭に首に背中まで見えた。

「来るかッ」

真っ赤で歪んだ瞳がとらえたのは佐久間の方だった。

佐久間は体勢を変えて階段を蹴り、両側の壁を蹴って上へと向かった。

大柄のヴァーテは階段でももろともせず、グングンと進んでくる。目の前の餌を目がけるようにジッと佐久間だけを見つめている。

「ッ！！」

二人の速度の相対性のせいで自分自身がどれほどの速さで走っているかを感じていなかった。

気づけばもう上の階は無く、屋上へ続く扉が見えていたのであった。

佐久間は扉を肩で壊して屋上へ転がりこんだ。

「わおおおおわあああ」

ヴァーテも息を切らすことなく屋上へ飛び込んでくる。

網羅製薬関連病院21

「少なくとも三人いるな」

ヴァーテの図体をうごめく三つの楕円形のシルエット。

単体ではこんなにも大きな形になることはなく、拒絶反応を起こした複数の吸血鬼が融合した結果と言える。

それぞれの意思が混同し、話すことは出来ずに単純な思考しか出来なくなる。

戦闘で言えば直線的な行動が多くなる。

ヴァーテは素早い動く軌道が対角なので避けることは容易だった。

隙を見て扉の中へ入りまた逃げようかとも考えているが問題はその後だった。

「逃げても追いつかれるな」

思ったよりも素早い。

銃で仕留められる自信は無い。数体の複合体は細胞の再生が異常に早い。

反面、老化が早いので短命で終わるといった欠点はあるが気の遠くなる話だ。

「一つずつ狙えるか？」

ヴァーテの攻撃を避ける都度、体内に盛り上がっている楕円形のシルエットを撃ちぬく。

苦しむ咆哮はするが、すぐさま、他の部分が盛り上がる。

内側へ引つ込めて新たな核を出したのか。それとも移動させたのか。

効果が見えない手探りのままにハンドガンを確実に当てていく。

「らちが明かない」

苛立ちながらもそれ以外に手はないと核を狙い続ける佐久間。

持久性になると吸血鬼細胞を有する佐久間とてスタミナ切れが心配される。

このヴァーテとの追いかけ合いは思うよりもスタミナを消費している。

「クッ……!!」

目がかすんでくる。

腕がしびれてハンドガンの照準がずれ始めた。確実に当てていた弾が二発に一度、三発に一度と精度が見る間に落ちていく。

ヴァーテの方は疲労も見えない。まだ余裕があるどころか、次第に速さを増している気さえする。

「意思が統合していつているッ?! そんなことはあり得るのか?」

直線的な移動から不規則な動きを混ぜてきていることに気づいて佐久間の焦っていた。

「違う…冷静になれ」

自分の動きが鈍っていることを確認して焦りは穏やかになった。だが、現実是不変ならない。

目の前に迫ってくるヴァーテもそのヴァーテが底なしの体力だと

いうことも。

皮肉にもこんな時、自分が人間だっと思った。

「ーッ」

ヴァーテの爪が眼前に迫ってきていることに気づくのが遅れた。

佐久間はハンドガンを盾にして爪を塞いだ。が、代わりにハンドガンの銃身がパツクリと二つに割れてしまった。

網羅製薬関連病院22

「こんなものでは勝てはしないんだろうなッ」

佐久間はグリップを投げながら後方へステップする。

複合体のヴァーテの弱点は意思が複数あること。ステップを繰り返し、いくつかの選択を与えると意思同士の意見の衝突からラグが生じる。

だが、ほんのコンマ数秒。
充分に追いつかれる。

「逃げてばかりだとどうにも出来ない」

少しずつ避けるタイミングもギリギリになってきている。

紙一重。寸前で回避した足元のタイルが割れ、飛び散った破片の一部が佐久間の身体を傷つける。

吸血鬼細胞の常人では考えられない再生能力で傷口は無いが、ポロボロになっていくスーツを見る度に焦りが募っていく。

あくまで再生が早いというだけで不老不死ではない。再生には疲労がついて回る。再生には命を消費する。

「ここから飛び降りて逃げられるか？」

屋上から見える外の景色を横目にそんな考えが脳裏をよぎる。

周辺で最も高いビル。アツチの球体の天井が近く、鳥迎撃用循環機が肉眼で確認出来る。

アツチの薄い膜を破らないために鳥や宙にある異物を除去する循

環機。カメラの部分が小さくて処理する機能が大きいのでコウモリとも呼ばれている。

「ーッ！！」

考えていたせいでステップが単調になっていたことに気付かなかった。

冷静に獲物だけを狙い定めていたヴァーテの爪が佐久間の右肩から斜めに振り下ろされる。

「やられたッ？！だがまだ浅いか」

佐久間は傷口に触れて確認しながらヴァーテの背後へと回り込む。破れたシャツ。触れた手には血がついている。だが、その血も蒸発し白い煙となって宙へ流れていく。

再生をする度に身体が熱を持つようになった。

全身が燃えているようだ。

ドクン、と心臓が血液を送り出す音が活発に体内を駆け廻る。

動け、まだ死なすわけにはいかない、と言わないばかりに心臓が言っている。

「た、…」

獣に似た声じゃない声が聞こえる。

「何だ？」

「た、た、」

「何だって言うんだよッ！！」

ヴァーテの丸みを帯びたお尻から丸いコブが盛り上がってくる。

そのコブが震えて、ヴァーテから逃げようとしているように思えた。
もしかすると……？意思の分裂なんてあるのか？と自問自答しながらも佐久間は爪を伸ばした。

そして、爪でコブとお尻の接着面の皮膚を斬ろうと足元のタイルを蹴った。

網羅製薬関連病院23

コブが落ちる。

コブを包む白い膜。またかたまつて膜になりきれていない油分を含む白い液体がタイルに流れた。

佐久間は着地と同時にコブを回収するために低空を滑走する。

白い液体の海からコブを掴んだ。

固まりつつある液体はねつとりと粘着して糸を引いていた。

その糸が切れるほど遠くでコブを持った手を離れた。

ヴァーテは先ほどまでいた中央辺りで動きを止めて痛みに悶えている。

「たすけてッ!!」

コブの中から足が見えた。

佐久間は爪でコブである白い膜の表面だけを斬り払った。

二つに割れたコブ。中には人がいた。

「静かにしてくれ。一体何があった？」

「えと…あの…」

「わりと冷静みたいだな」

白衣を着た女性。

白い液体まみれなのだが、目は虚ろだが焦点は合っていた。佐久間を見つめる目から次第に恐れが消えていく。

「何があった？」

「…はあ…はあ…」

「それでいい。ゆっくりと呼吸してから答えるまで十五秒やろう」

それから佐久間はゆっくりと十五の数を数えた。

ヴァーテの動向を見守りながらだが、心配はしていなかった。ヴァーテは趣味の悪いオブジェのように動かない。

女性は途中から佐久間の口元を見て同じ数を数え始める。

十の数を踏んだ辺りから徐々に白い液体が気になり、そこから立ち上がる。身体に付着する液体を指で払って十五を数え終えた。

「気持ち悪い…白い液体なんて…お嫁に行けない」

数え終えた女性がそう言った。

「お前は誰だ？」

「あなたはいい人そう。私は…」

「心配ない。俺はレーベ。ただの護衛役さ」

「使い捨てのつて言わない辺りに好感が持てる。レーベの人はどうしても自分は悲劇の主人公みたいに語りたがるもんね」

「何とでも言う方がいい。見たところ網羅の社員でも無ければ院内の関係者じゃないだろう？」

「どうしてわかるの？」

「白衣を着ているが…吸血鬼を見ても目を合わせるなんてあり得ない」

「…医者もサイボーグを雇って身を守ろうとしていたような気がする」

女性と言うよりかはまだ子供のようにだった。

白い液体を払うと化粧も一緒に落ちる。幼い顔をしている。

「ここへは非人道的な実験が行われていると通報があったの。それ

で調べている民間組織の一員よ」

「民間組織…？ヒューケか？」

「違…わないかな？ヒューケとは厳密に言えば違うけど母体は同じ」

「政府の人間でなく吸血鬼側でなければ全てヒューケさ」

「世間の認識だとそうね。色々違うんだけどな」

女はため息を吐いてうんざりとした表情で嘆いた。

髪についた白い液体がかたまり、取れないとわかった時点で萎える。

「私は霞真理^{かすみまり}。あなたは？」

長い髪の毛を後頭部で一つにまとめながら訊ねる。

髪についた白い液体を留めゴムに使うのを見て実践経験があるようなタフさを感じた。

「佐久間」

「そう。佐久間…レーベの佐久間…陽子ちゃんのお兄ちゃん？」

「ーッ!？」

「何？当たり前じゃない？患者の名前もその家族も全員憶えているし、医者も看護婦も全て。それが仕事だからね」

「…帯解っていう人間を知っているか？」

「…弟がいる人だったかな？行方不明の」

その反応を見て帯解との関係が深くないと知る。

だが、ヒューケのせいにされると言ってある以上何らかの関わりはあるはずだ。

もしくは偶然なのか？

「他に内通者は？」

「いない。いたとしても互いに知らない方がリスクは低くなる」

「知らされていない可能性はあるのか？」

「ある。末端構成員なんだから」

「…ああ」

末端社員には情報が降りてこない。

ただ任務を言われてこなす対価として報酬^{あした}をもらえる。

「聞きたいことは山ほどあるが、もう限界か」

ヴァーテの中での再構成が終わったようだった。

少しばかりすっきりした表情のヴァーテが旋回し佐久間がいる方角を見つめていた。

「プロでしょう？私はどうすればいいの？」

「…守りながら戦うことは不可能だ。一人でも勝てるとは限らない」

「はつきり言って私は諜報部員。情報戦を集める以外はただの可愛い女の子だからね」

「あざといな」

「事実を言っているだけ」

カスミは誇らしげに胸に手をやって答えたのであった。

網羅製薬関連病院24

「それともう一つ」

カスミは差し出した右手の人差し指だけをピンと立ててヴァーテの動きに緊張する佐久間に言おうとした時、佐久間が舌打ちをする。

「私はーっと待ってッ」

何かを言おうとしたカスミを抱きかかえて佐久間は移動する。

「首に手を回せ。掴まっている。お前には聞きたいことがある」

「待ってッ待ってッてばッ」

「黙ってろ！！舌を噛むぞ」

静かに指示に従いカスミは佐久間の首にしっかりと抱きついた。移動している佐久間は重さを感じながらもしっかりとした足取りで逃げ続けられている。

先ほどの時間で回復が出来ていると実感出来る。身体が軽い。これならまだ何とかなるか、と胸中でつぶやく佐久間。

だが、手は無い。おまけに厄介な荷物まで抱えてしまった。

「どうなっているの？」

佐久間の胸へ顔をうずめながらカスミが訊ねてくる。

ヴァーテの爪が数コンマ前まで佐久間がいた宙を薙いだ空気が震える音が聞こえて不安になったのがわかる。首に回した腕に込めた力が強くなるのを感じた。

「ヴァーテから逃げている」

「…それで？」

「選択肢は二つ。一つはお前を捨てて全力で戦うことッ」

「却下ッ!!」

悲鳴のように却下、と叫ぶカスミ。

佐久間は不規則に動いて背後を取ろうとしているがヴァーテの爪から逃れるだけで限界だった。

空を薙ぐ爪の一撃が残した残響が確実に鼓膜へ近づいてくることが不安にさせるようでカスミはその音が近づいてくるほどに身を小さく硬直させていた。

身体に力を入れるほどに重しになり、力を緩めるほどに口うるさくなる。

どう転んでも不利になる材料でしかないがまだ聞きたいことが山ほどある。

「もう一つを選ぶかッ？」

「私が死なない方向であれば何でもいいッ」

「だったらこれしかない」

佐久間は対角にいるヴァーテに背中を向けた。

そして同じ方角へ走り始める。グングン、と加速していくほどに首に巻き付く腕が緩くなっていく。ヴァーテの鼓動が遠くなり気が緩み始めるカスミに佐久間がささやく。

「飛ぶぞッ」

屋上を囲む背の高いフェンスへ一足で飛び乗った。

フェンスへヴァーテが突っ込んで足場が揺れる。だが、佐久間は

冷静にタイミングをはかって空へダイブした。

追いかけてようとしてくるヴァーテがフェンスを登ろうとしている姿が遠のいていく。

急激に身体が軽くなった後に重力が倍返しでのしかかる。

その反動で腕の中のカスミは気絶したのを悲鳴が消えたことで確認し終えた。

佐久間はグッとカスミを抱く腕に力を込めた。

「うっん…」

「目が覚めたか？」

「…あれ？」

カスミは起き上がり室内を見渡す。

見慣れた無駄に広い仮眠室。正方形の殺風景な室内にはベッドが一つだけあり、隅には折りたたみベッドが積まれていた。

「ここは…？」

ベッドからゆっくりと起き上がり室内を確認するカスミ。

奥には給湯室とシャワールームがあり、インスタントコーヒーの匂いがしていた。

佐久間はカスミの目の前に屈んで声をかけてくる。

「聞きたいことがある」

「あれからどうなったの？屋上でヴァーテに追いかけて」

佐久間はため息を吐いて立ち上がり、うんざりとした表情でカスミを見降ろした。

「飛び降りたのよ」

佐久間の背後、シャワールームがある方角から府内がインスタントコーヒーの甘い香りを漂わせて声をかけてくる。

「あなたは？」

「佐久間の仲間。この病院に置き去りにされたって意味ではあなたとも仲間かもね」

「は…はあ…」

「それで質問に答えて頂戴。時間があまり無いから」

府内は簡易ベッドが積み重ねられてある一角に寄りかかりながらコーヒーをたしなみながら会話を続けた。

「どうしてこの病院にいるの？」

「それはこの病院には倫理違反があると通報があつたので内密に捜査していました」

「そんなにベラベラと喋っていいわけ？あなた新人？」

「新人…新人ではありませんが私は人間。あなた達は吸血鬼。勝てませんから全面降伏した方がいい選択だと思います」

「わりとあっさりとしている子ね。まあ度胸も無ければ潜入捜査なんてこれないわね」

府内がそう言つて飲みほした後のインスタントコーヒー容器を足元に置いた。

「この際あなたが誰だつていいわ。教えて欲しいのは今の病院の状況」

「あなたつて…私はカスミです」

「私は府内。そっちのが佐久間。これで話してもらえるかしら」

「話して…？何を話せばいいのでしょうか？この院内のことなら私よりもレーベの皆さんの方が詳しいはずですが…」

「だったらどうしてヴァーテに取り込まれたのかを教えてくださいませんか。なぜ無事だったのかも聞きたいわね」

「わかりません。取りこまれたのも一瞬のことです」

「ヴァーテは何処から現れたの？ヴァーテになったのはここの職員？」

「いいえ。おそらく違います。この院内の職員は定時で帰っていますので残っているのは管理サイボーグだけだと思います」

「それなのにあなたはどうして残っていたの？」

「それが仕事なので…内密に探っていたことがあります」

「探っていたらヴァーテがふいに襲われたってこと？」

「廊下が騒がしくなっていました。私がバレたので誰かがやってきたのかと思い逃げようとした時にはもう飲み込まれていました」

「それは毎日探っていたのかしら？今日だけ特別ではなく」

「週に二回。勤務シフトによって空いた時間を狙って少しずつ進めていました」

「定時で帰っているならいつでも来れたでしょう？」

「いいえ。定時でも勤務シフトによって残る医師も少なくありません。誰もいないのは滅多にありません」

事務的な対応を繰り返している二人。

佐久間は二人から離れて部屋を出ようとした。

「何処へ行くのかしら？」

「任せた」

「ちよつと！！佐久間が拾ってきた荷物でしょう？」

佐久間は逃げるように室内を後にしようとする背中へ府内からの罵声が追いかけてくるのを遮るように扉を閉めた。

「生きて帰ってくるだけでなく、新たな生存者を見つけてくるとはな」

佐久間が入ってくるなり織田は振り返らずにそう労った。

部屋の中にあるガラスに囲まれた一角に赤ん坊が寝かされたベッドが等間隔に並べられていた。

織田は目を細めて中の様子を眺めている。中には赤ん坊の寝顔を覗きこんでいる光陵に興味なさそうに寄りそう大和がいた。

「ヴァーテも倒せていない」

「わかつている。一人では倒せないだろう。あの子を助けられただけでも相手の戦力の低下と情報の確保が出来た」

「偶然さ」

「何より時間を稼げたこともある。通路も全て破壊し終えて外へはダージュリーガルが向かってくれている」

「破壊するのが早いな。俺を見つけるよりも早く壊し始めたように思えるが」

「ああ。光陵がそう告げたことを実行した。不思議な力だよ。予言よりも先見という言葉が似合う」

光陵はすやすやと眠る赤ん坊の額にちょこんと触れて笑みを大きくしていた。

飛び降りた佐久間を受け止めたのも光陵の先見があつたからだと言つ。もうすぐ佐久間と誰かが降ってくると言つたと聞いた。

これも帯解の言つ第七感というやつなのだろうか。

「不安定な力らしい。時々、視えるってことなのかを知るのは彼女だけ。大和でさえ何もわからないと言っている」

「感受性が豊かってやつか。それとも超能力ってことか」

「誰も感じられない何かに敏感だってことはわかるが、実のところ何もわからない。同じ班にいないければ馬鹿げていると言っても言っただろうな」

素直な感想をもらす織田。

光陵の印象は控えめな少女だった。いつもうつむき加減で大和の影に隠れているが何かを感じると淡々と何をするべきかを命令する。何かに乗り移られたかのように言葉だけが少女の意思を超えて口内から溢れているようだ。

機械的に繰り返される言葉には有無を言わせない強制力があつた。

「帯解はここで実験がされていると言った。第六感を超えた精神の進化を追及している」と

「精神の進化。人間が進むべき道はそこにあると誰かが言っていたな。ヒューケの歴代の指導者だったはずだが」

「マルクス・ウォーレン。彼の子供も自閉症であり差別をなくすためにそう提唱したと網羅や心羅は否定的な意見を持っている」

「網羅も心羅も否定はしていないと思う。ただ肉体的進化をうたっている製薬会社が精神の進化を提唱する思想家を大平に支持出来ないだろうけどな」

「本当は支持し、それに倣うべく進化の方法を考えていたということなのか？」

「さあ？互いに胸の内はわからないものさ。俺にはただの利権争いにしか見えないがね」

織田は複雑な表情を浮かべる。

短い髪の毛に薄い顔立ち。特徴というものをそぎ落とし普通とい

う仮面をかぶっている中肉中背の男。深紅の瞳と鋭い爪を隠せば優しそうな青年に見える。

書物を持って公園にいれば学生に間違えられるだろう。

「…もう一つ、帯解はその実験から助けるために子供達を逃がしていると言った」

「それならば光陵も連れていくはずだと言いたいのかな？」

「わからない。ただ気にはなっている」

「迷っているんだろうな。何を信じるべきか」

「…」

「まあ焦ることは無い。妹さんも帯解と一緒に悪いようにはならないと思う。少なくともそう信じるしか手はない」

陽子のことを思い出す佐久間。同時にそのことを思い出して感じる自分の心を探ろうとするが、水面に浮かぶ泡を掴むみたいに触れようとすればパチンと割れてしまう。

佐久間が気になっていることは行方がわからなくなる前と病室の表情が別人みたいだったことだ。

ほんの数日の間に何かがあった。消えた空白の六日で何かがあった。それだけが確かなこと。そしてそこに答えがあると確信している。

網羅製薬関連病院27

「まだなのか？」

「確かに遅すぎる気がするな」

織田は時計を見上げた。

リーガルダージュがこの部屋から階段を下り、外へと向かったのがちょうど一時間前。玄関までは安全を確認しながら歩いても十五分で辿りつける。

「ヴァーテに出会ったのか？」

「いや俺の電子板と連絡が取れるように回線を確保している。アツチの中にいれば回線が途切れないようにバックアップもしてある」

「ヴァーテに襲われるか外部との連絡が取れるなら連絡が来るようになってるんだとしたら今も連絡が取れるのか？」

「こつちからは難しい。向こうの言語に合わせられる時間も技術も無かったから待っているだけだ」

織田は電子板を取り出して回線の状況を確認する。回線に不備はなく、ウィルスソフトを使ってバグも確認したが問題は見当たらなかった。

「アツチの回線を使っているならマリー側からの干渉は出来るだろうな」

「もしも…網羅が何かをしようとしているという前提で話せばそうなる」

「疑いが晴れない内は自分で動かない方が得策か。だがいつまでも籠城してはいられない」

「わかつている」

佐久間はスーツの内ポケットを探り煙草を探した。

レーベの戦闘員用の服はいわゆる戦闘専用の作業服ではなく、市街地に馴染めるようにビジネススーツに似たデザインになっていた。白いシャツの上にベストをかけてその上に重ねるように銃のホルダーを両肩から交差させてわき腹辺りに落ち着くようにしてある。人によれば腰の位置や足首にもホルダーをつけてあったり、ジャケットの裏側に装備をしてある場合もある。

府内のように機能美よりも見た目を選ぶタイプも少なからずいるがやはり珍しいと言えた。

佐久間や織田のは通常のタイプに銃のホルダーを複数追加してあるベーシックなタイプ。最も多く、これがスタンダードな着こなしと言われている。

「慎重に行動すればいい」

自らに言い聞かすように織田は呟いた。それは心の声が吐露したようなくらい儚い声で佐久間は瞳を閉じて聞いていないふりをした。指に触れた煙草のシガレットケース。過去に誰かが放った銃弾を受け止めた傷跡が生々しく残っている。

中に残っているのは七本。一番左にある煙草を取り出して口に咥えようとしたところで大和と光陵がこちらへ戻ってくる。

「院内は禁煙だぜ」

「…悪いな」

「身体にわりいんだから辞めるよ。煙草がかっこいい時代は終わっただんだよ」

大和はそう言って咥えた煙草をかすめ取り、離れた場所にあるゴ

ミ箱に煙草を投げ捨てた。

「それでどうするんだ？」

「ダージユの帰りを待つ」

「待ってどうなるんだかね。もう帰っちまえばいいんじゃない？普通に何もしてないしな」

「連絡が取れない内は動かない方がいい」

「ってもよ、問題は帯解が言った言葉だけなんだろう？それだけで危険だーとか何かあるーだの言ってもさ」

大和が露骨に不機嫌そうな顔をして愚痴る。

子供用のスーツは無く特注の服を着ていた。光陵と揃いの学生服に似たデザイン。黒を基調としたモノクロな服装。アクセントとしてディテールに散りばめられた白色が目立っていた。

「それだけで充分だ。仲間の言葉を信じよう」

織田がそう言うつと大和は愚痴っぽく言うのを辞めて代わりにため息を吐いた。

子供にはあまりに長い時間なのかもしれない。光陵も口には出さないでいるが疲労の色は顔に出ていた。

「だったらまずはあのお姉ちゃんの話でも聞こうか」

「もうそろそろ冷静に話がまとまっているはずだからな」

「めんどくさいんだよな。全てが」

と佐久間にもらす大和であった。

「何だ？」

「いや煙草を吸ってから入ろうと思ってな」

「そうか。それならいいんだが」

佐久間は通路に立って織田が室内へ入っていくのを見送った。

残り六本の内、一つをとって口に咥えた。ケースからジツポライターを出して火をつける。

通常ならば天井についてある煙感知装置がスプリンクラーを作動させることになっていることは知っている。

「……」

作動が無いことを確認した。

全ての感知センサーが切られていることは防犯カメラも動いていないだろう。天井につりさげられたカメラを横目に佐久間は口から煙草を外した。

今わかつていることは記録をされていないが、監視はされているという事実。カメラの脇にある録画の際に点灯する赤いランプが点滅しているのをただ眺めていた。

その奥にいる誰かに問いかけるような鋭い眼差しを瞼の裏へ隠して煙草の味をかみしめる。

「自分のせいでこうなった、とても思っている横顔ね」

織田達と入れ替わりに出てきた府内が窓際に立つ佐久間に声をかけてきた。

何杯目かのコーヒーだと気づいたのは時間の経過ではなく、砂糖を入れていないその匂いからだ。府内は杯を重ねる度に甘さを減らしていく。

「そんな人間じゃないのは知っているだろう？」

「そうね。じゃあ何を考えているのかしらね？」

「煙草を味わっているだけだ」

「嘘。もう舌の感覚なんてとっくの昔に消えたでしょう」

「舌が憶えている」

「そうやって昔の面影を追いかけるのね。男つてのは何て未練がましいのかしら」

府内は佐久間の正面に立つてそう言った。視線は佐久間よりも十センチほど低いが女性にしては背の高い方だと言えよう。

「次は嗅覚を失うのかしらね。そうすればこのコーヒーの匂いも記憶しておかないとダメね」

「さあ…何も失わない人間もいると聞いた。モルモットの実験だと確率は均等にならない」

「逆を言えば全てを失う可能性も0ではない」

「ああ。山岸隊長のように何もかもを失い、痛みと孤独と絶望だけを抱えて死を求める人もいる」

「あのおじさんね。湯川隊長みたいにモルヒネと酒に溺れる人もある意味幸せな暮らしなのかもね」

「AIDSやガンの末期の患者と同じ扱いになる。麻薬も処方箋があればいつだって手に入る。お金も充分に支払われる」

「遺族に支払われるはずのお金を前借りしているだけなんだけどね。ほとんどの場合は死ぬ前に使い切り借金生活になって遺族年金でその借金を返しているのが現実」

「…そんな話をしにきたのか？」

「あんたがしたんでしょうがッ」

府内が佐久間の言葉にあきれるように返した。

「それで何か話したのか？」

「あの子ね。嘘は言っている様子もないけれど全てを話しているっていう風でもないわ」

「そうか」

「ヴァーテに取り込まれていた前後の記憶も曖昧でショックで飛んでいる可能性も考えられるけれど彼女自身、半信半疑で組織にいたってことは事実ね」

「疑っていた？」

「あまりにもうまくいきすぎていることに疑問があったみたいね。招かれているかのように指示通りにしていれば情報が見つかる」

「彼女はまだ新人だろう。あまり高度な情報は扱えるようには思えないが」

「もちろん程度の低いあまり重要ではない話ばかり扱っていたわ」

府内は立っていることに疲れて佐久間の隣に移動し、窓枠へもたれかかる。

佐久間も煙草を革靴の裏で押しつぶしてフィルターを千切り二つにした煙草をゴミ箱へ投げ捨てた。

網羅製薬関連病院29

「悪いなッ話は後回しになりそうだ」

佐久間がそう言ってエレベータがある方角へと仮眠室で自衛用として扱われていたと思われるハンドガンを持借したものを向けた。静かな沈黙がやがてざわめく空気が通路を吹き抜ける。

「いくら何でも多すぎるわね」

「何かが漏れたのか。上に残してきたあいつか」

「確かにこの広がり方はウィルスに似ているわね」

府内もハンドガンの装填を確認して佐久間と同じ方角へ銃口を向けた。

「ヒューケのせいにつてのは生物兵器なのか？」

「パンデミックが出るのを黙認するほど網羅はバカじゃないわ。全ての吸血鬼細胞を求める列が心羅へ歩みを進めるでしょう」

「その先に儲け話があるとすれば」

「中和剤…緩和剤…それともこのアツチ全体で実験しているとでも言いたいのかしら？」

「悪魔の壺っていう話もあるしな」

悪魔の壺とは悪魔を一つの狭い空間に入れて自然淘汰の後に生き残った悪魔が最強の悪魔となったという神話。

最高のヴァーテを作り出して戦争でもしようって言うのだろうか。複合体でも数が増え過ぎると日の光を浴びても問題ないという仮説も確かに存在している。

「だとすれば網羅は神にでもなろうっていつのかしらね」

「人間の進化を追及している根底は創造への憧れ」

「または自己実現の達成」

府内は言葉を言い終わるより早く引き金を引いた。

死角から飛び込んできたヴァーテの右肩を弾け、その勢いはヴァーテの身体ごと吹き飛ばした。

「まだまだいるってことね」

「ああ」

「足音からすれば少なくとも三体はいるわね。あの吹っ飛んだのを含めて」

「足りるか？」

「充分」

角から飛び込んでくるヴァーテを狙い射撃を続ける二人。

銃弾の雨が降り注ぐ廊下に飛び出し続けるヴァーテを精確に撃ち抜き悲鳴を散らしていく。

銃口からは白い煙。熱がこもったハンドガンから伝わる確かな感触。

ずっと奥に倒れるヴァーテを撃つたのは自分だという事実。

異形の姿をしているが人間だと割りきれなければPTSDになり、自分が自分で無くなってしまうだろう。

「終わりね」

府内はハンドガンを下げてホルダーへ投げ入れる。

熱のこもったハンドガンがわき腹にあって妙な気分になる。探していたあの痛みよりも優しい熱の方がずっと心にしみわたる。

「何があつた？」

「ヴァーデが来たわ。そろそろ動かないとまずいかもね」

顔を出した織田へ府内がそう答えたのであつた。

網羅製薬関連病院30

「動くと言っても赤ん坊はどうすんだよッ」

「置いていくしかないわ。部屋の機械は稼働しているままだし、敵と出会って無事に赤ん坊を守れると思うわけ？」

「それは…無理だろうな」

「光陵のことを思っただけの言葉だろうけど現実はそのなりに甘くないわよ」

「わかってるって…ただ助けたのに…」

言葉に詰まる大和は黙りこむ。

「これから何処へ行くんですか？」

「地下へ行って車へ乗り込む。アツチの外へ出れば連絡を取る手段はいくらでもある」

「連絡が取れない？あなた達はレーベでは？」

「色々あるんだよ。俺達でもわからないことが起こっている」

不安げに織田を見上げるカスミに不器用ながら笑みを返して安心させようとしていた姿に佐久間は複雑だった。

カスミは本来は敵であり、捕まえなければならぬスパイであることを供述したばかり。

少しずつ意識が動かされているならば注意する必要があるなど自分に言い聞かしハンドガンに銃弾を補充した。

「ダージュリーガルからの連絡はまだないのか？」

「いや何もないな。反応はまだ消えていないことから動いてはいるってことだ」

「織田よりも上位の命令を出来る立場にいる人間からの命令を優先してあるか」

「もしもそうならば…考えたくもないな」

織田はそう言つて表情を強張らせ電子板を再確認する。

何度も話しては先送りにした議論だが本当にそれが事実だとすればどう対処すべきかを佐久間は考えておくべきだと心に釘を刺しておくことにする。

とつさの判断はリロードしていた弾丸と同じで覚悟しているかどうかが重要なコンマ数秒の世界。

もしもそうならば嫌な言い方になるが帯解に陽子を連れていかれて正解だと言える。

陽子…どうしているんだろうか。

佐久間の脳裏に過る陽子は無理に笑っているように見える。はたして自分は陽子の為に何が出来たのだろうか。そしてこれから何が出来るのだろうか。

「…急ごう」

佐久間はそう言つて脳裏に浮かぶ陽子を消したのであった。

先頭に立つのは佐久間と織田。真ん中にカスミと光陵。最後尾に大和と府内を配置して縦長の移動列を作つて進むこととした。

慎重に進んでも吸血鬼細胞を持たない人間であるカスミには追いつくのもやつとの速さだった。

「病院はどれも同じに見えるな」

「慣れても変わりませんよ。病院は人がいて表情を作ると言われています」

「軽い病状の人ならば笑顔が溢れて重い症状ならば涙を流して遺体になれば無になる」

「嫌な言い方をしますね」

「…事実だ」

カスミに佐久間が返す言葉はどれも棘があり、それは適度に距離を置くための手段の一つだった。

本来ならば無駄話も辞めておきたいが息が詰まる状況で進むよりはリラックスして進む方が足取りは軽い。

疲労は判断を鈍らせる。適度の会話はそれを緩和させてくれる。

「この階にエントランスがある」

「ダージュはここから外へ向かったんだな」

「ああ。だがここから出るのは勇気がいる」

「危険すぎる」

「考え過ぎならいいが用心に越したことはない」

織田と佐久間の会話に耳を立てるカスミ。

情報を集めるのが癖になっているらしく聞き耳を立ててしまうと

二人の視線に気づいて釈明しながら地下へと続く階段へ急いだ。

地下は広い駐車場があった。

スロープを降りて周囲を確認するが人影はない。

「各自の車で同時に別方向に移動しよう。大和と光陵は俺の車にカスミは佐久間の車に乗って合流地点は追って連絡する」

織田はそう言って自分の車へ向かって走り始めたのであった。

網羅製薬関連病院 31

「あの…」

府内と織田の車が出た方角と別の出口へと車を走らせ始めた佐久間にカスミはおそろおそろ声をかける。

佐久間は外部カメラと通信機関連を確認しながら無言でカスミをちらりと見る。

「質問があるんですが…いいで…しょうか？」

「何だ？」

「私はなぜこの車なんでしょうか？」

「織田の車が良かったか？」

「違います。話をする時に府内さんだったのにどうして今は…この車に？」

佐久間がしばらくの間、無言のままでいるとカスミは細かいことが気になって、と付け加えた。

ハンドル脇についてあるボタンを押すと中央に映されるモニターが立体地図になった。仲間の車の位置情報が点滅して別方向へ流れていくのがわかる。

「三半規管が常人程度ならば失神では済まないだろうな」

一つだけモニターが追いつかない速さで走っていく点があった。カスミはルームミラーを見て後方を振り返ったが紫外線を遮断する黒いガラスに阻まれて何も見えない。

不安げな表情になって視線を戻すとモニターには衛星からのカメ

ラが府内の真つ赤な車にズームし始めていた。

「このモニター……ってこんなもの映していたら危ないですよ。どうやって外を見るんですか？」

「そつちからは見えていないが運転席からは外が見えるように外部カメラとリンクさせてある」

「そ、そうですよね」

委縮するカスミはため息を吐いて頭を垂れた。

車が動いているのは振動でわかるが状況がわからない不安は言葉に出さなくても佐久間に伝わっているようだった。

「助手席用のカメラがある。吸血鬼用の車に乗るのははじめてか？」

「はい」

「だったらダッシュボードにあるインカムを耳につけてナビを起動させる」

エアバックの少し下にあるダッシュボードを開けて中から新品同様のインカムを見つけ、耳にひっつけた。

耳を覆うような流線型のデザイン。中央にボタンがあってそれを押すとナビが始まった。

「もうすぐ外に出る」

ナビに従って外の景色をパノラマビューで見えるようにした直後にそう言われた。

外の景色はアツチを覆う薄黒い膜の内側につけられた人工的なライトで昼よりも明るい光が星のように散りばめられていた。

地下から登っていく道路は一直線に病院の玄関部分を見おろせることが出来る位置へ続いていた。

入口には整列した状態のダージュリーガルが見える。他にも複数
の人影が確認出来て、それらは玄関に向けて銃口を構えていた。

「アーリーの故障のおかげか、ジャミングが逆効果だったか」

「…どういことですか？」

「本来はここへいる部隊じゃないってことさ。情報が正確では無か
ったせいでこんなにも簡単に逃れた…」

逃れた、と言った言葉で佐久間は顔色を変えたのをカスミは気に
なった。

「いや違うな…見逃されたってのが正しいのか？」

佐久間自身迷っている様子でそうつぶやいた。

網羅製薬関連病院32

「レーベは網羅製薬の警備隊でしょう？連絡が取れないくらいで何をそんなに慎重になっているの？」

「ずっと見てきたからだ」

「…何を？」

「この瞳で現実を見てきた。網羅に切り捨てられたレーベを殺したこともある」

「ヴァーテになったから…それが仕事だからでしょう？」

「違う」

短く佐久間が答えた言葉にカスミは何て反応をすればいいのかわからないで定まらない視線を宙に泳がせた。

玄関で銃口を向けていた人間が構えを解いて立ち上がる姿があり、司令官クラスの人が来たことが窺える。

相手からは見えていないがカスミは無意識にシートの深くもたれかかり隠れようとした。

「その手段を俺達は知っている。今回の場合は狙われたわけではなく、巻き込まれたケースになる」

「巻き込まれた？」

「帯解の言っている言葉が正しいのであればヒューケと網羅新羅は交戦状態に入るだろう。その布石として今回の事件があるとすればの話だが」

「つまりは憶測の範疇を超えていないってことでしょうか？」

「仕事をしていれば嫌でも敏感になる」

「常に最悪の状況を考え、最善と思われる行動をする…今回の場合最悪なのがヒューケと網羅との戦争が始まる理由がアーリーの故障

でそれを仕掛けたのがヒューケだつて公表すること？」

「吸血鬼対人間の構図が目に見える形でアツチに現れることが最悪なこと。最善なのは正確な情報を得るまで逃げのびること」

それに尽きると佐久間は言つてアクセルを深く踏みつけた。

網羅製薬関連病院33

「お前だつて思うことがあるから大人しくついて来たんだろう？」

「吸血鬼を敵に回して逃げ切れるわけないですもん」

「逃げる？もう情報は無いと判断されたお前に何の価値がある？」

「嫌な言い方ですね」

カスミはナビに従つて玄関辺りに集まっている司令官と思われる人間の顔にカメラをズームさせ表情を確認しながら佐久間に答える。音声が届こえるシステムは無く、周辺を囲む人間やダージュリーガルに指示している姿だけがカメラに映っていた。老齢の男。蓄えた髭をさする癖があり、それは読唇術を防ぐための手段であることに気付いた。

「大事な部分は口を隠して話をしている」

「読唇術か」

「見直しましたか？優秀なんですよ」

軽口を叩くカスミを鼻で笑う佐久間にむすつとした表情を浮かべる。その余裕が憎いんだけどね、と小声で嫌味を付け加えてカメラをズームアウトさせた。

広域になるカメラは病院全体を見渡せる位置で止めた。

灰色のクリスマスツリーのように入り組んでいる道路の中央を真上へ向かつて走る真っ黒な車が佐久間の車だと認識させて玄関や病院やその他のあらゆる施設からの距離をサイドバーに表示させる。

今走っている道路の回りを螺旋を描くようにねじ巻いた道路が左右から複数伸びてあり、それらを通行する車の認識も済ませ何処の組織の所有する車かを特定しカメラ内を動いてある車に所有団体名

をスタンプしていく作業をカスミは数分で終わらせた。

「これで視界は確保出来ました」

「情報部だと言うのも嘘じゃなかったらしいな」

「はい。それもこの若さで潜入を任せられる程度には優秀ですけどね」

優秀、という言葉に強くアクセントを置いて話すカスミが佐久間のふいに見せた感嘆の表情に悪戯な笑みを浮かべた。

やはりまだ子供だというのがはつきりとわかる。それは年齢だけでなく瞳に濁りがなかったことがそう知らせてくれる。

誰かを失えば、何かを失えば、何かを疑えば、誰かを殺してしまえば、脳裏に過る現実をその瞳の奥へ押し込むようにゆっくりと瞬きをする佐久間。

現実が記憶をつかさどる海馬へ落ちるのをコマ送りに見終わるとまた表情は消えた。無表情の方が深紅の瞳には似合う。

「網羅と新羅の関係車両が多いですね」

「ここは網羅の病院だからな。新羅とも交流がある最西端の病院」

「一般車両は…見事なまでに0」

「登録をしていない網羅の私用車も一般車両になるのか？」

「はい？」

「なるのかって聞いているんだ」

「そんな言い方…はいはい。なりますよ」

「だったら交通規制がある。この時間だと仕事帰りに通過する私用車が一台も無いのがあり得ない。もしかすると通信にジャミングをかけてあるのは院内じゃなくセクターごとなのか？」

「直接リンクするか周波数を合わせる原始的なやり方以外を遮断しているなら上からの映像もここへ転送出来ないはず。院内のジャミングも無いと思います」

「どうして？」

「NICUも衛星管理システムを使用しています。作動していたのに通信だけが出来ないのは通信をしているが拒否しているか、通信のように情報を衛星へあげる作業に何らかの障害があるか」

「そんなことがあるのか？同じ距離を同じ移動方法を使って移動しているのにアツチからは衛星へコンタクトをとれないのは考えにくい」

「衛星へのハッキングを防ぐためや単純なノイズカットのために特定の端末からの通信を完全に遮断する方法はあります」

「そうなる中へ俺らがいたのを知っていた、ということに――」

佐久間が何かに気づき、伏せるッ！と叫んだ途端、車体がバウンドするほどの衝撃があった。

網羅製薬関連病院34

「モニターには何か映っているのか？」

佐久間は暴れるハンドルを押さえながら冷静にモニターを確認させた。

グッと沈む車体に天井が平たく何かに押しつぶされていくように迫ってきているのを不安げに見上げながらモニターを解析するカスミ。

肉眼で見れる外の景色はカメラに何かが覆いかぶさっているせいで真っ暗だ。

「ーッ」

「心配ない」

迫ってくる何かの気配が天井から左右の扉から背後からも聞こえてくる。複数なのか、単体なのか。生き物であることを伝える意思だけが車内の空気を震わせる。

蒼白な顔になるカスミに追い打ちをかけるように全面から衝撃が加わってくる。いつか映画で見た車体ごと握りつぶそうとする竜の手がふいに脳裏に通り頭を振るカスミ。

「大丈夫…大丈夫…」

「目を開ける！！瞼の裏に隠れても逃げられやしない」

「わかっている…わかっている…大丈夫だから」

自分に言い聞かすようにつぶやくカスミが大きく息を吸って呼吸を整える。

その間も車体の揺れは激しくハンドルを押さえても真っ直ぐは進めなくなっていた。左右へ揺らされている。

あの細く天へと伸びる道路を走り続けて五分。おそらくアヅチから出るには足りずに外側を囲む池掘りの真上を通過している最中だと思つ。

「カメラから見えないのならば衛星からのカメラの角度を変えてみる」

自分自身の身体へ指示するカスミ。徐々に自分自身の身体と意識を近づけていき、冷静さを取り戻す。

「出た。何…これッ」

「屋上から飛び降りてきたかッ!!」

あの屋上で対峙したヴァーテが屋根に乗っかかり車体にしがみついている。

車の位置はまだ病院からそう離れていない距離で屋上から飛び降りたとしても充分に届く範囲だった。

五分…そんなに走っていないのか、と佐久間は自身のずれを修正しろと自分自身に強く命令する。

「このまま郊外へ行けば紫外線でヴァーテは焼くことが出来る」

「無理だ。それまで車体がもたないだろう」

「だったら左右に振って落とすしかないの?」

「それも難しいな。この道路は細すぎる。おまけに落ちれば…全員死ぬだろう」

「だったら…だったら…どうしたらいいのッ?!」

カスミはヒステリックに叫んだ。

それを吸収するために無言を貫く佐久間。カスミの浅くなった呼吸と外側からくる圧迫感が室内に焦りを募らせる。おまけに車体が歪む音まで迫ってきていた。

「ダッシュボードの中にハンドガンがある」

「ハンドガン?!」

「そう。自分の身は守れよ」

「ちよつと私は情報を――」

ドスン、と世界が沈んだような衝撃があつた。

同時に前後左右の窓ガラスにヒビが入り、隙間から光が漏れた。

車内には生き物の臭いや息遣いやうめく声が流入してきてカスミは口元を押さえてダッシュボードを探った。

ハンドガンを手に取る。ずっしりと重く、膝の上へ置いた。

網羅製薬関連病院35

「安全装置を外せ」

「知っています。授業で習いました」

「聞いているだけでいい。安全装置を外せ。そして両手でグリップを握り狙いよりも少し下を狙ってハンマーをおろせ」

「少し下？何を狙うの？」

「握力が足りない人は反動で上へ向く。しっかりと握れ。必ず離すなよ」

「…」

マジマジとハンドガンを見つめて言われた言葉を口内で復唱するカスミ。目を閉じてイメージを浮かべた。射撃訓練の成績は優秀とは言えなかった。

「撃ち方はわかったな。次は窓を割る。割られて車内に破片が散らばるよりは外へガラスを出せ」

ハンドガンを逆さに持ってグリップを窓へ叩きつけると窓ガラスが割れてすぐ近くにヴァーテの乳白色の指先が見えた。

佐久間は肘で側面のガラスを割ってから右ストレートでフロントガラスを割った。それを横目にカスミもフロントガラスをグリップで割った。

視界が明瞭になり、人工的なライトの雨が眩しい。

「ーッ！！」

ヌツと現れたのはヴァーテの太く短い尻尾。

ボンネットに叩きつける度に車体が丸ごと揺れた。さつきから断続的に続く衝撃の正体。

佐久間はアクセルを強く踏みつけた。

加速をしたGが身体にかかりシートへ押し付けられるカスミ。その手にはしっかりとハンドガンを握っていた。

「この先には堀がある。水の流れは緩やかでかなり深い」

「え…？何ッちよつと聞こえないッ」

「降りて戦えるほどの余裕はない。堀の中に落ちればジツとハンドガンを抱いてジツとしている」

「ッ何ッ？！全然…ちよつとッ」

「要するにまた落ちるってことだ」

そう言つて佐久間はアクセルをまたしっかりと踏んで加速させる中、生身の人間には耐えきれないGに意識を途切れさせられた。

薄れていく意識の中、カスミはただ佐久間の言った言葉を繰り返し唱えていた。

しっかりとハンドガンを握っている。しっかりと握る。握る…握る…に…

「行くぞ」

細く長い道路がアツチの天井に最も近い位置へ来た時、車体がふわりと浮いた。

その時にゆっくりと意識が飛んだカスミは視界に近づいてくる全身に降り注ぐ光に飲み込まれていくのを感じた。

水路

「無茶しおって」

「…どうなった？女は？」

「生身の人間には辛かるう。となりで治療をしておる」

「サイボーグにはするなよ」

佐久間はふつと笑ってベッドから起き上がる。

水の中へ飛び込んでから気絶するカスミを抱きかかえて水辺を泳ぎ続け、１キロ先にある捨てられた街の入口で倒れているところを犬のベルチャーに発見された。

下水道とは別になっているのだが生身の人間には不衛生すぎる水だった。カスミは怪我こそないが、念のため検査と投薬治療を行っていた。

ここは角田というダージュリーガルを設計した男の家。

「端末はないのか？外の様子が知りたい」

「まだ休んでおくべきだな、と言いたところだが見た方がいい」

禿げた頭と折れた腰を擦りながら散乱する机の上から端末を取り出す角田は録画してあったニュース画面を開いて佐久間に渡した。

映像は網羅製薬の病院。おびただしい数の兵士とダージュリーガルが病院を囲んでいた。

「テロが…あつた？誘拐もあり、網羅側はこれをヒューケ側の仕業と公表し政府に強い要請を求めている」

テロップを読む佐久間。

帯解の言葉通りだ。無意識に顔を歪めると足元で座っていた犬がくうーん、と鳴いた。

あの老犬とそっくりな胴体の長い犬。年齢から見てもこれは子供だと思われる。

「お前さんも映っておる。あの一緒にいた女はダンヒアレーブルの諜報員だな？」

「ダンヒア？」

「何だッ？！知らないで連れておったのか…」

呆れる角田はよれよれの白衣の裾をまくって佐久間の腕にある傷口にあててあったガーゼをピンセットでめくった。

驚異的な回復にも見慣れた様子で傷口を確認するとすぐにガーゼを捨ててカルテに書きこんだ。

「院内には違う調査で行ってたまたまあの女を拾った」

「帯解の調査かな？」

「相変わらず情報が早い」

「知らないことはない。この街にしていると聞きたくない話まで聞こえてくる。特にこういう仕事をしているとな」

「仕事というより趣味を変えた方がいい」

佐久間はベッドから降りてベルチーの頭を撫でてから椅子にかけてあったシャツを着た。

細かい傷だらけだった身体はすでに治っており、体内にある細菌も排除されているのが自分自身で感じる。全身を脈打つ血流とやけに暖かな体温がそう知らせてくる。

シャツのボタンを止めるために指の背が肌に触れる。妙に暖かな感触があつて指先が止まった。

水路2

「報道はこういう形で報道されていた？」

「院内に病原菌をばら撒いたダンヒアの女を確保するように仕向けたエージェントが裏切り、逃走」

「誘拐の方は？」

「詳細は何も書かれていないな。長期入院患者の数人が誘拐され、何らかの意図があるとして追跡調査中と」

「そっちがヒューケのせいになっていると言うことだな？」

「そうだ。ダンヒアとヒューケは母体が同じなので世間では同一の組織と認識されている」

ヒューケは過激派でダンヒアは穏健派と分ける人が多い。共に吸血鬼細胞に意を唱えて網羅と新羅を解体するように政府に進言し続けている。

母体は経営組織連合。輸出と製造分野の組織。一節には吸血鬼よりもダージュリーガルを普及させようとして反対しているとも言われている。

利権争いと見ている国民の関心は大規模な戦争になるか、ということであった。

政府の票数も過半数を占める政党は無く、連立政党が維持し続けている限りはどちらかに傾くことはないと思われていた。

「織田達は報道されていないのか？」

「それは無い。お前さんも場合もまだ調査中と書いてある。報道局によりヴァーテから守るためだと好意的な報道もあり、ネットでは色々な憶測が飛び交っており」

「ヴァーテか…」

水の中に飛び込んだ時にヴァーテは屋根から剥がされた。

その隙にカスミを回収し水の奥へ泳いだ佐久間を追いかけようとする意思と浮上しようとする意思がぶつかり合い、その場でジタバタと暴れている内に逃げ切ることが出来た。

この水路は入り組んでいて万が一追われたとしても十分に逃げ切れる自信はあった。

この捨てられた街は故郷と言ってもいい。孤児にとっては最後に行きつく場所でもあり、ここで未来を選択する。吸血鬼か、人間牧場へ行くか、はたまたヒューケやダンヒルへ加入するか。

「帯解の報道もされていないのか？」

「帯解のライセンスが失効したが、未だ逃走中。ヴァーテになった危険も考えられ充分に注意するように、と」

「…それだけか？」

「そうだ」

「お前さんは弟に面会しようとする帯解を説得するために病院へ居たんではないのか？」

「ああ…」

角田は煮え切らない態度に眉をひそめたが、深くは立ち入ろうとはしなかった。

「世話になった」

無言が続いた後にそう言ってカスミの眠っている隣の部屋へ向かうとした佐久間の背中へ

「陽子ちゃんの安否は聞かないのか？」

「陽子は無事だ」

「…それなら良い」

と角田は言つて作業へ戻つた。

振り返らず佐久間もカスミの部屋に続く扉を開けた。

水路3

「…あ、大丈夫でしたか？」

カスミは点滴の残量を確認しながら液体が落ちる速さを調整する円形のネジを親指で弾き、もう片方の手で自らのカルテを確認していた。

部屋は薄暗く四角形。壁際には薬品棚があり佐久間ならば手を伸ばせば届く程度の天井から等間隔に三列に並んでいた。

窓は無く、足元には電脳や回路の部品が乱雑に積まれた箱が大量にあった。それを気にすることもなくカスミは身体の経過を記入している。

「外の様子は把握出来ているのか？」

「質問を質問で返さないで下さいよ」

ベッドの枕元の少し上にある三段目の薬品棚にカルテを置くカスミはまだ意識がもうろうととしているようで虚ろな瞳を浮かべている。弱い笑みを浮かべるカスミの横顔。後ろ手で扉を閉めようとした隙間から又ツとベルチャーが室内へ入る足音にカスミの視線が動いた。ベルチャーはカスミの膝に両前足を置いて舌を出した。その額を撫でるカスミにベルチャーはお礼を言うようにわん、と小さく吠えた。

「アツチと外の世界の境界線上にある街にいる」

「入り組んだ水路と焼却場や廃棄場がある埋立地へ続く街ですよね？」

「そうだ。端末が生きていたのか？」

「いいえ。もらったハンドガンも携帯端末も社員IDも全てダメに

なりました」

ベルチーは満足げに尻尾を揺らして頭を振って床に向かって鼻をひくひくとさせた。

何かの匂いを辿り積まれた回路の一つを咥えて扉を爪でひっかくので佐久間は片手で扉を開けて奥の部屋へと通した。

「撃つことが無くてホッとしています」

耐えられない沈黙を埋めるようにハンドガンに対する感想をつらつらと並べて微笑む。

熱がまだ残っているようで顔はほんのりと赤くて頬に何度も手を当てていた。思考も少し鈍くなっているせいで同じ話を何度もしては訂正するのを短い返事で返す佐久間。

「えっと…あの…」

「もう話さなくてもいい。情報はまだ錯綜しているからゆっくりと休める時間はある」

「いえ。そんな大丈夫ですからッ！！私はやれます」

黒目の輪郭をなぞる光が涙を誘う。何度もこの街で見てきた捨てないでくれ、と言うような懇願する表情。佐久間の視線に気づいてハッとしたカスミは両手で顔を隠した。

「優秀なんだろう？ だったら休める時は休むのも大切だ」

「…本当に大丈夫ですから。それに—」

呼吸を整えながら顔をあげるカスミ。佐久間は視線を外して汚い室内を見回した。あの頃と何も変わらない部屋。子供の時に見たより狭く感じるが、不衛生な印象があって医務室とは思えない。

何かを言おうとしたカスミは佐久間の横顔に勢いを失った。ゆっくりと頭を垂れて視線を小さく膨らむ胸へと落とした。

「俺はこの街で情報を集めてくる。端末でも出回らない情報も末端作業員の口から聞ける」

「ダメですよッ！！その姿で現れたら誰も喋らなくなります」

「……」

「すいません。でも吸血鬼はやはり世間的には畏怖されるものですから」

「わかつている。だがずっと中へいるわけにもいかないだろう」

佐久間は深紅の瞳でカスミを見おろした。丸めた背中にかかる長い黒髪。開いたシャツから見える鎖骨。小さな胸。表情を隠すダラリと垂れた前髪。

さらに小さくなるうとするカスミがダメ、としか言わなくなる。まるで駄々をこねた子供のように何度も言った。その姿に陽子を重ねて佐久間はグツと奥歯を噛んだ。

陽子： どうしているんだ？と胸中で言った。

水路4

「あ…それならうちのオフィスへ行きましょう」

「オフィスへ？」

「そうです。新しいIDも取りに行く必要もありますし吸血鬼でもパートナーとして契約している諜報員も多いので目立たなくて済みますよ」

「情報も必要だしな」

「はい。そうだと決まれば眠ってなんて居られませんか」

まだ途中の点滴針を腕から引き抜いてカスミはニッコリとほほ笑んだ。

「だがダミーのIDが無ければ…フリーのIDチケットが無ければ網羅側の人間だとバレてしまうぞ」

「あ…」

小さく言葉を失ったカスミ。

「で、でも何とかありますってッ！！IDの通過チェック場所を避けて通れば大丈夫。その情報も整理しておきますから」

カスミは大丈夫、と言う度に不安になる佐久間。

だが吸血鬼を警戒して話を辞められると意味がない。

「あ、そうだ。ダミーを作るプロもいます！！これで全ての問題はクリアですね」

ニコツとほほ笑むカスミがベッドから降りて角田がいる部屋へとよれよれと歩いていく背中を右手で支える。

奥の部屋。角田は机に向かっていて足元にはベルチーが前足を重ねて眠っていたが、扉が開く音でハッと顔をあげる。

「行くのか？」

角田は振り返らずに訊ねる。

「ああ。世話になった」

「そうか」

ただ短い会話を交えて佐久間はさっさと部屋を出ようとする。

「ちょっと久しぶりに会った知り合いなんでしょう？もつと話をしなくてもいいんですか？」

「急ごうって言ったのはそっちだ」

「そう…なんですけども」

冷たく振りはらう佐久間の姿勢に言葉を引つ込めるカスミ。

佐久間の背中と角田の残る室内を交互に見るカスミがベルチーと目が合った。同じ顔をしているね、と胸中でつぶやくと同意するようにはベルチーはくうーん、と鼻を鳴らした。

診療所は街の角にあった。掘りの波打ち際に隣接しており、診療所の脇に見える小さな段差に佐久間とカスミが倒れていたと言っていた。

段差にはゴミが引つ掛かってあり、不衛生な印象が増している。風通しが悪く、埃とカビと藻が全面に見える。やけに高い天井に続く迷路のような水路にもたれかかるように都市がつくられてあり、人は狭く細い水路の縁を移動していた。

佐久間達がいる位置よりも低い位置に流れる水路もあつて足を踏み外せば奈落の底へ落ちることが想像出来るが、実際の目には暗闇しか映らない。

ただ水が流れる音が反響して不気味だった。

「オフィスはどっちにある？」

「上にあります」

「ダミーを作れるやつもそこにいるのか？」

「はい。変わった人なんで中にはいませんがオフィスの近くにいると思います」

「変わり者はこの街には多くいる。変わり者がこの街にいるのか、この街が変わりモノを作るのか。どっちなんだろうな」

流れる水を見上げながらポツリと溢した佐久間が歩き始めたのに遅れないようについていった。

水路5

水路の端でゴミが詰まって山を形成している場所で佐久間は足を止めた。

そのゴミの山には大人用のタンクトップだけを被る子供が群がって何かを集めていたが、一人が佐久間に気づいた。

「逃げる！！殺されるぞ」

誰かが叫ぶと視線は佐久間へ注がれる。逃げながらもジッと睨みつける子供もいれば一目散にゴミの隙間に身体をねじ込む子供もいる。

赤ん坊を抱きかかえてその場でうずくまる女の子もいてゴミ山は騒然な雰囲気になったが、周りにいる大人たちは無反応だった。

不気味な光景。子供だけが恐れるのには理由があり、佐久間も実感している。

吸血鬼は子供を誘拐することが多発している。その理由は複数あり、どれも口に出して言うことも嫌になる。

「大丈夫ですよ。この人はそんな危険な――」

「いい。そつとしておけ」

カスミが細い縁を全力で走り去る子供へ声をかけようとする隣で佐久間は歩き始める。

ゴミ山の奥にある梯子を登れば上の階層へ行ける。ダンヒアのオフィスは郊外にあり、アツチの管理からギリギリ離れる位置にある。佐久間は距離にすれば短いが、痛いほどの視線を全身に感じながら階段へ歩いた。

うずくまる子供やゴミの隙間から覗く子供。伏せて頭を隠す子供にその子供を抱いて佐久間を睨む子供の脇を通過しようとした時だった。

「この吸血鬼がッ！！怖くねえぞ」

頭を隠す子供を抱えていた子供が佐久間の脇へと飛び込んでくる。佐久間は軽く子供を身体ごと片手で払った。尻もちをつく子供の手には真っ赤に染まったナイフ。

「ッ！！血ッ？」

「大丈夫だ。そっとしておけ」

「佐久間…さん？」

「何も言わなくていい」

「で、でも…」

佐久間のわき腹からは真っ赤な血が流れていた。驚異的な回復で傷口はふさがれるだろうが痛みを感じないわけではない。

何も無かったかのように歩みを進める佐久間。ナイフで刺した子供は自分のした恐ろしい行為に恐怖し、血のついたナイフを水路へと捨てて青ざめた顔を隠すように頭を隠す子供へ被さった。

表情一つ、視線一つ変えずに真っ直ぐに進む佐久間が階段を登り始める。

カスミは後を追いつながらもわき腹から流れ、黒ずみ始めた血の跡にどうしても視線がいつてしまう。

「気にするな」

「気にしますよ。どうして…こんなこと…」

「吸血鬼は怨まれるものさ。子供はさらわれ実験所送りにされることもある。誰にも気づかれず、誰にも知られず、逃げられることの

ない現実に潰される」

「そんな…ひどい…」

「子供も怖い。この街に住んでいる人間は誰だって怖い」

「だからって佐久間さんが刺されるのは…」

「慣れたって言えば悲しいって言うのか？殴り返して殺せば満足か？」

「違います！！でも…」

「子供を救いたいのか？この現実を嘘だっって言いたいのか？」

「違います！！」

執拗に責め立てる佐久間にカスミは首を振って違う、とだけ答え続けた。

そして最後に佐久間は一言、だから黙っているだけで言っただけ歩みを始めた。

水路6

ダンヒアの支社は廃墟に思えるようなほどに殺伐とした印象があった。コンクリート打ちっぱなしの壁に囲まれ、天窓が高い位置に見える。

「カメラが二台。センサーの位置からすれば抜けられないな」

佐久間は入口の扉の上部にあるカメラを遠くから見上げてカスミに言った。

「そうですね。やっぱり先にダミーを作る人に会いに行きましょう」

「…それはどっちの方角にある？」

「えっと」

カスミは周囲を見渡して暗記していた座標を口にしてからそれらを方角や距離に換算して佐久間に伝えた。

距離にすればほんの数百メートル。

佐久間とカスミはそこへ向かって歩いていった。

「何かあったのか？」

佐久間は通行禁止になっている路地の多さに疑問符を投げかける。こんな場合、電子端末を持っていれば情報がすぐに手に入るがまともな端末を持っていない二人には迷路に迷い込んでいるように思えた。

路地の中央に浮かぶ警告の文字。追尾式で触れれば吸血鬼でも焼け焦げるほどの電流が流れる仕掛けになっていた。

「…探しているってわけではないですよ？まさか」

「だとすれば角田の家に押し込んで取り押さえられているさ」

「ですよね」

カスミはホッと息を飲んで胸をなでおろした。

「音が聞こえる。誰かが通る？パレード…？違うな」

「戦車？キャタピラの音がしますね」

「上に軍がいるのか？この上には…確かヒューケの支社があるはずだ」

「戦争…始まったんでしょうか？」

「演習ってわけじゃなさそうだが、戦争と決めつけるのも早過ぎる」

佐久間はさつさと水路の縁を渡り続け、立ち入り禁止になっている路地の隙間をすいすいと進んで目的の方角へ進んで行く。

ついていくのがやっとなカスミ。息を切らせながらも何とか佐久間に追いつこうとしていた。

頭上からのキャタピラの音は配管に反響して迫ってくるような迫力があつた。このフロアの二つ上に地表があり、相当な数の何かが横切ったことはわかった。

「何か…怖いですね」

「床が抜けて水路が崩れることは無い」

「そうじゃなくて…不安になりませんか？この音とか」

「いや」

短くそう返す佐久間。相変わらず自分のペースで足を進め続けている。

カスミはいつしか話すことも出来なくなるほどに疲弊していた。

立ち入り禁止区域が多すぎてかなり遠回りしている。

何十分後だろうか、佐久間は足を止めてここだろうか?と一件の周りの光景に馴染んでいる一件の小さな建物の前でカスミに振り返った。

水路7

「友川さんッ！！いますか？」

扉を押し開けてカスミは訊ねた。薄暗い室内に甘ったるい匂いが充満している。シロツブやハチミツです、と警戒する佐久間へカスミが言った。

何度目かの友川への呼びかけに答えるように奥から人の足音が聞こえてくる。部屋の床も壁もコンクリートなこともあり足音はかなり響いて聞こえた。

正方形の形をした部屋の奥に見える扉の縁だけがある部分の暗闇から人の足先が見えた。その人影は背中を反り足をするように歩くので暗闇が上半身を押さえているようにも見えた。

男の全身が見えた。カップを片手に背骨をトントン、と叩いている丸メガネの男。よれよれのシャツと破れたデニムにサンダルというラフな姿をして欠伸をする。

「病院じゃないんだけどね」

佐久間の脇に見える血の痕を見てそう言った後、

「あーそういうことかい」

と妙に納得してほほ笑んだ。

「あのー」

「無理だね」

「まだ何も言ってますんけど」

「知っているよ。ニュースも見たし社内からの伝令も来ているよ」

「…伝令？」

「悪いけど力にはなれないと思うよ」

友川は壁に寄りそうように身体をふらふらと流して右手を伸ばした。

明かりがついた。友川の指にはスイッチがあった。

「ニュースってのは網羅病院とヒューケのやつか？」

「それはこつちじゃ関係なくはないけど伝令は違うね」

「端末はあるか？見せてくれ」

「いいよ。水の中に飛び込んだ映像もあつたから近くにはいると思つていたんだけどね」

友川はデニムのポケットから小さな端末を出して佐久間へ手渡した。

「ヒューケが病原菌をばら撒いて院内の患者をヴァーテへ変えた。生存者は赤ん坊と君達だけ」

「ばら撒いたのは誰と？」

「憶測が色々あるね。カスミだつていうのもあるし、中にいる他のスパイってのもあるし」

誘拐の事件は書かれていない。その時は新薬の実験が行われていた事実も伏せられている。

ヒューケと網羅の確執が延々と書かれてある記事ばかりが並んでいる。それに添えられたコメントも両者の関係者が煽りあっているように見える。

「もういいかい？」

「ああ」

端末を友川へ返そうとした佐久間は異変に気付いた。

「勘がいいね。でも遅かったね」

「囲まれたか？」

「ここも敵地でもあるからね。いつでも捕まえられたけどあまり手荒な真似はしたくないんだ」

「……」

「何より吸血鬼様に暴れられるとこっちもタダじゃ済まないからね」

友川は固まる佐久間の手から端末を受け取り笑顔でそう言った途端、入口や奥の部屋からダージュリーガルやダンヒアの兵士が銃を構えて狭い部屋へ入ってくる。

「佐久間さん……すいません」

とカスミは不安げに言った。

水路 8

両手を拘束された佐久間はダンヒアの支社へとカスミは別の場所へと連れて行かれた。

支社の中、両手を塞がれた佐久間を囲むダージュリーガルの数は七体と友川が並んでいた。

「施設内に檻？ツていうかしばらくいてもらうスペースがあるんだ」

「…そこは端末はあるのか？」

「端末？君は何かを探しているのかな？」

「ああ…そんなところだ」

「まあ端末は無いけど吸血鬼細胞の薬はいくつかある。朗報と言えばそれくらいかな？」

友川と共に入口をくぐると中は真っ白な世界だった。

ライトが反射されて何もモノが置いていないせいでかなり広いロビーに感じる。

「ダンヒアが俺に何の用なんだ？」

「僕も聞きたいね。偽造IDを作ってまで中へ入ろうとした理由を、ね」

「情報が欲しいだけさ」

「その身なりだと会話すらロクに出来ないだろうから情報を集めるのも不便だろうね。カスミにも何を知りたいか言える間柄では無さそうだし」

部屋に入ってすぐ右手に曲がり壁際にある階段を降りた。

真っ白な世界が暗闇にとけてむき出しのコンクリートが見えると

一気に空気が重くなった。

「ここでいいよ、と言うように手をあげる友川にダージュリーガルは階段を降り終えた長い直線の通路で足を止めた。

「ダンヒアの人間は吸血鬼が怖くないらしい」

「自信家って言うて欲しいね。僕は吸血鬼細胞を持っていないとも吸血鬼に負けない自信があるんだ」

「そうは見えないな」

「見せない努力ってのが大切なんだよ。こういう仕事をしていると特にね」

冗談をつつき合いながら進む友川。

ダージュリーガルがいなくなった後も変わらない歩調で変わらない姿勢、相変わらずのすり足で歩く背中を追いかける。

長い通路の奥には楕円形の部屋があった。真ん中を仕切る鉄格子があつて一部が開いている。そこへ佐久間は入るように指示された。佐久間が入ると開いていた一部に電気檻が現れた。文字が浮かんで警告文章が浮かんでくる。

「薬だったね」

「拒絶の薬は必要ない。代わりに適合を抑える薬をくれ」

「適合し過ぎる吸血鬼細胞なんだ…珍しいね」

「ああ」

「違った薬を飲むと副作用で困ったことになるからね。こればかりはちょっとした検査では何ともならないよね」

「信賴ってことさ。互いにな」

「僕が違う方の薬を持ってくれば、君が嘘をついていたら、と考えると信賴だよ。うん。信賴っていい言葉だと思う」

「…」

「君は信賴出来ると思うんだよ。カスミが信じたのなら僕も信じる

よ」

「それはどうも。信頼が出来たなら端末も持ってきてくれると助かる」

「それはどうか」

と苦笑いして通路へ消えていく友川だった。

水路9

頭上から響くあのキャタピラの音も聞こえないが、耳にキンと響く甲高い音があった。

壁には小さな穴が無数に空いていてそこから超音波か何かが出ているのか、と佐久間はぼんやりと考えていた。

友川が薬を投げてよこしてからずっと入口の脇の壁に背中を預けて目を閉じて黙っている。

「…何も」

小さくこぼした友川の声で佐久間は顔をあげた。

「何も出てないよ。君の耳が静けさにやられただけだね」

「思考を読みとる機械でも開発したのか？」

「そうだね。機械だったら良かったんだけどね。オフにもオンにも出来るし」

「その言い方だとお前が心を読めるとでも言えそうだな」

「その通り。君の妹さんと似たような力だね」

「ーッ！！」

「おっと…怖い顔をしないでね」

「何を…何を知っているッ!？」

感情をあらわにする佐久間を観察するような瞳。

「…って言うのは冗談。檻だつて安く無いからね。壊されたらまた経理に怒られちゃう」

その視線を緩くかわす友川は壁際から背中を離して佐久間の入る檻に一步ずつ近づく。

「網羅が行っている実験は元々僕らの実験だったんだよ。でもそれが上層部にバレちゃってね」

「…お前らが？」

「そう。半分は実験の続きをするために網羅と新羅へ半分は実験を捨ててこっちへ残った。僕も実験には興味があつたけど面倒になるのが嫌だったんだ」

「信じられないな」

「信じる信じないは自由。僕の話を見から情報を聞きだす為の作戦だとしたらこの音は君の言う脳波を読みとる機械かもね」

「ふざけているのかッ」

軽く脅す口調で佐久間は言ったが、友川は悠然と歩みを進めている。檻を信頼しているより自分が佐久間よりも優れていると言わなければかりの自信がうかがえた。

「進化つてのは命が産まれたその日からずっと続くもので当然僕らも進化しなければならぬと思っっている。だけれど数百年や数千年なんてゆうちよなことをやってるより遺伝子配列をいじる方が圧倒的に時間を短縮出来ると思わないかい？」

「遺伝子配列を変えることなど出来ない」

「そうだね。破壊することは出来ても組みかえることは不可能とされている」

「何が言いたい？」

「だから脳の進化を諦めて肉体の進化を選んだんだよ。再生医療の偶然に出来た分裂だけでなく生産が自ら行える細胞を使っただけ」

「それが吸血鬼細胞。誰でも知っている話をわざわざ話したいのか？」

「知識を披露する場所が無くてね」

友川は苦笑いを浮かべる。もう足を止めて檻のすぐ前まで来ている。手を伸ばせば佐久間にも触れられる位置。

狭い檻の中に座り込んでいる佐久間でも生身の人間が動くよりも速く首をへしおれることは理解しているはずだが、一向に警戒する様子はない。挑発しているようにも見えない。

「そんな後ろ向きな研究は敗北だと思わないかい？だから僕らは精神の進化を提唱したんだ」

「…精神の進化？誰かもそんなことを言っていたな」

「誰かだなんて冷たいね。元相棒でしょう？」

「ーッ！！」

その言葉に反応する佐久間の一挙一動を確認するような視線が全身に絡みついてくる。まるで蛇だ。

「突然変異で能力を持つ人間もいる。それを調べて解析すればその能力を持つ人間を造り出せるなんて楽な研究じゃなかった。当然、多くの犠牲があった」

「だが成功させた、とでも言いたいのか？」

「残念だけど成功はしなかった。結論から言えばそういうことになる」

「矛盾しているな。お前は思考を読めると言って成功はしていないと言っている」

「そうだね。僕は嘘をついているとすればやはりこの耳障りな甲高い音は何かの装置なのかな？」

「堂々巡りをさせても話を続けたいのか？」

「何だったら一日中でもいいよ。僕は君がお気に入りなんだ。何よりあのカスミが心を開いている秘密を知りたい」

「惚れているのか？」

「悪いかい？」

「いいや。情報を集めようとするのがダンヒアのやり方らしいなって感心しているのさ」

「ハハハ。なるほど。冗談も言えるんだね」

友川は視線を外すと身体に巻き付く蛇も消えてしまった。

「それで惚れているならカスミにIDを渡さなかった？」

「一秒でも君の傍にさせたくなかった嫉妬だね。僕はこう見えても情熱家なんだ」

「似合わないな」

「ハッキリと言うのが好みなのかな？まあいいや。その話よりも大切な話をしよう」

「大切な話？」

「今の状況を短く言うとな網羅が政府や軍に大義を与えてくれたおかげでヒューケに監査が入ることになった」

「それが…どうかしたのか？」

「全施設のチェックになる。当然、見られたくないものだったたくさんある」

「網羅や新羅だって公に出来ないのはかなりある。何処もそんなもんさ」

「そう。でも曖昧にしてきた問題を探られて公にされたら困ったことになる」

「何が…何が言いたい？」

「問題は病原菌をばら撒いたのが誰かってこと。それが事実なのかも含めてね。不適切な実験の結果があたの事故だったって網羅側の誰かが言えば解決するね」

「俺に証言させたいってことか？」

「そうだね。カスミにも事情を聞いている。本当は衛星に残るカメラのデータやダージュリーガルの内臓カメラを証拠品として押さえられたら良かったんだけどね」

「無理だろうな。もう消去しているだろう」

「だろうね。アーリーが故障ついでにマリーも点検っていうタイミングも完璧だ。シナリオは確実にこなされていくのを止められない」

お手上げ、と肩をすくませて大きく息を吐く友川。地味な顔に似合わないオーバーアクションだった。

「結局、上の方針会議が終わるまではジツとしているしかないってことだね。組織つてのは大変だね」

「ヒューケが帯解を抱きこんで陽子をさらったのはそれを見越した誰かの作戦つてことなのか？」

「さあね。下っ端な僕には君がシスコンつてことくらいしかわからない」

「妹は…俺の命そのもの。何を失っても妹だけは助けたい」

「正直だね。そうか…カスミには正直なのがいいのかな？」

「嘘を言っても無駄なんだろう？」

「無駄だね。嘘を言う理由も無いしね」

友川はその場に座り込み、佐久間と目線の位置を合わせた。

「…精神の進化だつて言っていた。あれは肉体に害を及ぼすのか？」

「それはまだ何とも答えられないね」

「そうか」

二人はこんな風に途切れながら会話を続けていた。

あれから何時間経つだろうか。友川もジクソーパズルのピースを探すみたいな目で佐久間を観察している。頭の中で自分にないピースをリストアップしていそうな顔をしていた。

「そろそろかな…」

友川はデニムのポケットから端末を取り出して情報を確認する。
その顔色が見る間に曇っていくのが思考を読めない佐久間にでも
わかる。その手にある端末に流れる文字もはつきりと見えた気がし
た。

水路 11

「君が思っているのは違う…」

友川は端末のディスプレイに指で触れて画面をスクロールさせながら佐久間に言った。

「端的に言うと二重スパイの容疑がかけられて審議会へ連れていかれている」

「審議会？」

「そう…まずいよ」

友川の声は消えてしまいそうなほどに儚いものだった。弱音を吐いて胸の内を佐久間に見せたのはこの男の純真さからだろう。

佐久間がいるにも関わらず自分の感情を隠そうともしていない。

「審議会は何処で開かれる？」

「郊外に見える崖に背中を預けるように立っているあれだよ。高い壁に囲まれているから目立って仕方ないだろう？」

「ああ。それでわかった」

「逃げようにも外には人間牧場用に貼りめぐらされたセンサー群があるし正規の道を通れば必ず検問に行きあたる」

「チェックは厳しいのか？」

「必ずIDと中の荷物を調べられる」

「どんな人間でも…か？」

「もちろん。ダンヒアの代表であっても調べられる」

友川は爪を噛んで焦りと戦っている。

「管理コンピューターをハッキングして中の様子を探っている。審議の様子は…っと出ない。どうなっているんだよッ！！」

「落ちつけ」

「落ちついていられるかッ！！僕のせいで…カスミは捕まったようなもんだろう？」

「そうじゃない。二重スパイ容疑をかけられたのは俺と一緒にいたからだろう？」

「そ、そ、そ…そうだね。僕のせいじゃない…僕のせいじゃない…」

少し落ち着いてくる友川は口元にねじ込む指を離して大きく息を吸った。精神的な疾患だろうか。徐々に落ち着きを取り戻すとまた穏やかな口調に戻った。

「そして、君のせいでも無い。ごめんね。いつもこうなんだ…自分の予定と狂うとすぐに頭がおかしくなっちゃう」

「誰だってそうさ。ただ少しばかり大げさ過ぎるっただけだ」

「そう言ってもらえると助かるよ」

友川は照れるように微笑んで端末をスクロールする手を止めた。妙な間があいた。この瞬間に誰かの思考を読んでいるのか、それとも頭を回転させて解決方法を考えているのか。

表情が全く無くて瞬き一つしていない。

「ダンヒアとヒューケは同じ母体だから管理するホストコンピュータが同じでデータもある。だから君が知りたがっているデータも得られる」

「…」

「妹さんのことも帯解のことも知れる。保護されているのか、人質にされているのか。どういう状況に置かれているだけでなく投薬履

歴も閲覧することが出来る」

「網羅が手を出せないってこととヒューケが妹をどうするつもりかも知れるってことだな？」

「知りたいことは全て知れる。居場所もわかるし話すことも出来る。待って…」

友川は言葉を切ってようやく瞼をきつく閉じる。

「帯解つてのは空間移動出来るのか…病院の壁…ゲートを開いた？」

陽子の病室で見た光景を読みとっているような口ぶりで友川は話した。思考だけでなく、記憶も読めるのか。

佐久間は訝しげに目を細めてさっきまで慌てふためいていた友川を見つめる。

「いなくなった日のことも…僕がいればその日のこともわかるよ。

僕はね、何でも知ることが出来る」

「それで俺に何をしろと言うんだ？」

「ここから逃げて僕の言う通りに行動して。カスミの無事と引き替えに情報の全てをあげるよ」

「まだ審議さえ始まっていないんだろう？いいのか？逃がしても」

「審議なんて形だけ。要するに捨て駒ってこと。君達ならよくわかるでしょう？」

「だがスパイとして罰しても意味があるのか？」

「網羅側の主張を退けられる。網羅側はカスミを病原菌をばら撒いた犯人として公表するつもりらしいから先手を打ってスパイとして罰すれば真相は闇の中になる」

「死人に口無しってことか。だがそんな簡単に話は終わるのか？」

「僕も政治はわからないけれどそれらに詳しい人間の会話を盗んだらそう聞こえた」

「盗む？」

「思考を読むのは遠くでは無理だけどこいつがあればネットがある場所全てを知ることが出来る」

目を開けて端末を手に持ち、左右に揺らした友川は誇らしげにそう言った。

水路12

「これが偽造ID。君はダンヒアの社員のボディガードとして扱われる」

「それは誰の？」

「架空の人間さ。一応、非常勤研究員のことになっているから知らなくても当然なんだ。出入り出来るエリアは制限されるケドね」

鉄製の柵の隙間からIDを投げ入れられたのを拾う佐久間。名刺ほどの大きさで中央にチップが組み入れている非戦闘員用のID。

レーベのように戦闘する人間のIDには防水・防火などあらゆる衝撃から耐えられるように設計されていたがこのIDは薄いプラスチックにチップを挟んでいただけのもの。

「戦闘用は高すぎてケチって普通のIDを渡すことが通例だよ」

「そうか。戦闘は行わないんだな」

「そういうこと。説明の手間が省けて助かるよ。後は骨伝導のメッセンジャを耳の裏の軟骨に当ててそっちからの声は聞こえないから気をつけて」

友川から形状記憶素材のメッセンジャを受け取って耳の形に沿ってピッタリと貼り付ける佐久間。

「カメラは無いよ。セキュリティよりもコストをとる会社はダメだと思うけどね」

手の甲を唇にあてて話す友川。マイクを袖に忍ばせてあるらしく

それに話しかけると佐久間の耳につけたメッセンジャに聞こえることが理解出来た。

思考を読めるっていうことに疑える余地はないようだ。何を言わなくとも完璧に受け答えをしてくる。

佐久間は友川を見る。外見的に副作用がある様子は無く、時計をしていないことで何らかの投薬をしていないこともわかる。

「精神の進化つてのは遺伝子も薬も関係ない。使用している脳のリミットを切れば誰もが能力を持てるようになる。それが何の能力なのかは個性になってくるけどね」

「リミットを切る？簡単に言うんだな」

「簡単さ。量子力学の世界だよって言うても無意識に眠る鍵を解除していく作業がめんどくさいんだけどね」

「身体に害はないのか？」

「リミットを切ればもう二度とリミットをかけられなくなる。言うならそれが害かな？発火や放電の能力なら制御出来る脳が無ければ自滅する」

「俺の能力も何とか出来ないのか？」

「時間が足りないから無理だね。能力があればもしかすると神経を治せるなんてずっと妹さんのことばかり考えている」

「陽子は…陽子は俺の命そのものだ。そのためなら何を失ってもいい」

「組織を裏切ることでもそれで命を失うことになっても無事を確保出来れば死をも受け入れる。はたしてそうかな？」

「…」

「本当の君は死にたがっている。この世界にある全てから逃げたがっている。妹の命だけがここへいる理由。君は死を望んでいる。違うかな？」

「さあ…どうなんだろうな」

佐久間は立ち上がると鏡のように友川も同時に立ちあがった。友川は細みの身体だが身長は佐久間よりも数センチ低いくらいの高さはあった。

「まあ何にせよ君は君の為に僕は僕の為に手を組もう。そしてカスミを助け出した後にまた会おう」

「断る理由はない。網羅にも戻れない。ここにいても拷問に合うだけだ。だが一つだけ聞きたい」

「何だい？」

「俺がこのまま逃げたらどうするつもりなんだ？」

「戻る場所がある人間は企業吸血鬼なんてならないよ。吸血鬼になれば人間である全てを捨てることとなる」

「たかが肉体活性化されただけなんだがな」

「人は大衆になりたがる。差別してマイノリティを作り出すのがいつの世も行われてきた歴史だよ」

「コマのような形をした支配制度は資本主義の崩壊で終わったと思っただがそうでないらしい」

「ユダヤ教の弾圧と同じ。少数派が少数派を作り大衆派は少数派にならないように少数派にすぎりつく構図は変わらない」

「そうだな。だが一つ違うのは俺がこんな姿にならなくても帰る場所なんて何処にも無かっただろうな」

「人の心を読めても全ての情報を手に入れても人の心はどうにもならないよ」

「どうかしてもらおうなんて思っただけさ。ささいな反抗ってね」

「覚えておくよ。やっぱり勉強になるね、君は」

友川はほほ笑んで三歩ほど下がる。

鉄製の柵を臂力だけで左右に開く佐久間は涼しい顔をしていた。人が充分に通れる隙間から外へ出る佐久間はそれを見ていた友川へ向かって歩いた。

「起きたらメッセージをくれ」

丹田へ軽く一撃を放って気絶させようとする佐久間はくの字に曲がり意識が飛びかけている友川の身体を受け止めながら耳元でそう言った。

水路13

「いい趣味をしているね。そのシャツは一番いいやつなんだ」

「見えているのか？」

「偽造IDに位置情報を仕込んである座標だけでなくもつと細かな位置もわかる。建物の何階にいるのかもその建物を立体図にしてディスプレイにリアルタイムに再現することも出来る」

「声も聞こえているのか？」

「聞こえてはいないね。でも僕の内には集音マイクが仕込まれているからそれで建物内での声は聞こえる」

血だらけのシャツを壁際にあつた子供達がいたゴミ山に続くダクトへ投げ捨て集音マイクを探す佐久間。モニターが置いてあるデスクの裏側を手で探ると小さなデッパリがあり、指で触るとマイクであることがわかった。

「マイクを触るのはマナー違反だよ」

「そんなに楽に話せているということは一人なのか？」

「ああ目が覚めたら医務室で色々聞かれたけれど元々ひょうひょうとしていたからね。使えねえなつて何処かへ行つてしまったよ」

「だったらここも危ないか…」

「まあ僕の家は大丈夫。コード指定されてあるからカスミと僕が作ったIDを持つているパス解除するのに時間がかかるから誰も行きたがらない」

部屋を見渡しても生活感が全く見えない。ゴミはすべてダクトへ捨ててあり、掃除は小さなロボットが毎時間行っている。

静かで隔離された部屋。夜の病室もこんなのだったんだろうか。あまりに寂しくて一人には広すぎる。

「モニターの脇に携帯端末があるのが見えるかい？それは受信専用になる」

「知っている」

「パソコンも使えないのはわかってるよね。最も社内や他の組織ヒューケとかのセキュリティコードを突破しようとするにはスペックが足りなさすぎる」

「扱える技術もない。端末はとった。外へ出る指示を頼む」

端末を乱雑に奪い取って外へ向か時、足元にロボットがぶつかる。円形の掃除ロボット。中央から進行方向を決めるセンサーがある部分の少し端にスイッチ類があり、そこに赤いランプが点灯していた。

佐久間は足を退けてロボットを跨いで部屋の外へ向かった。

中の暗闇とは違って外はライトのおかげでそれなりに明るい。昨夜から半日経ったというのにニュースは網羅病院一色。情報も錯綜して世論は専門家の言葉に翻弄され続けていた。

「うわー！！」

子供の叫び声が水路に響いた。

身体を乗り出して少し下の層のゴミ山へ目を向ける。血のついたシャツを手にとって腰を抜かす子供に群がるダンヒアの警備隊。近くにいる、探せと指示する隊長の号令で散開する男達。

「不安になるね。こんな警備じゃ」

友川のため息を耳にしながら佐久間は騒ぎとは反対側へ走った。

水路14

「その路地へ」

IDをかざすと路地をふさいでいた警告付きの球体がゆっくりと床へ吸い寄せられる。床へ着地すると同時に警告も消えて代わりに路地の足元を照らすライトが点いた。

充分とはいえないが無いよりは道が見える光にそって歩みを進めながら友川の指示に従った。

「郊外へは向かっていないよ。郊外へ出る道へはそのIDでは通過出来ない」

降りているように思えるな、と心でつぶやきながらも友川の声へ従った。この道を行くと何処へ繋がっているのかも検討がつかなくなりつつある。

複雑な道は方向感覚を失くし上下を繰り返すことにより高さもわからなくなる。ここがダンヒア支社よりも低い位置になるか高い位置になるのかさえわからない。

まるでゲームの世界を歩いているようだ。足元の通路が柔らかな素材で出来ていることもそう感じさせる一つだ。

「ダンヒアのボディガードが動けるのはセキュリティレベルが2以下の施設や通路のみ。2以上はダンヒアの社員証が必要なんだ」

通り過ぎるだけの路地を横目に見ると社員らしき人間がIDをかざしているのが見える。警告が消えて球体は浮かんだままとなって

いることから足元が柔らかいのは球体が発する何かのせいだということがわかる。

追いかけられないため？だとすれば左右の壁に触れるのは危険だろうな、と佐久間は左右の壁に足元に落ちていた小石を投げる。小石はバチツと小さな音を立てて粉々に潰れた。

「センサーが壁にあるから今のサイズだと問題ないけどもっと大きな衝撃があると通路が封鎖されるから気をつけてね」

「話せないってのは不便なもんだな」

「それと何があるうと戦闘は禁止。ボディガード同士でいざこざがあっても巻き込まれないようにしてね」

「流れモノが多いとそうなるな」

「その問題のせいでダージュリーガルが増えて吸血鬼は少数派だから顔を覚えあっている可能性もある。機械はごまかせても人は難しいってこともある。充分に気をつけて」

細い路地を繰り返し抜け続けるといつの間にか天井や底が見えないほどの高さが上下にある円形の吹き抜けになっている場所へと辿りついた。

足場は円形の縁にそって螺旋状に続いている中腹の位置と繋がっている。佐久間は身を乗り出して底を眺める。

「ここは元々演習施設で今はヴァーテの廃棄場になっているんだよ」

光の届かない闇に底が見えない。だが、そこには確かに何かがある。つてつごめく意思を感じる。

「今じゃ演習施設じゃなくて村井ヴァーテ施設研究所の所有地ってことになっているからデータも見れないからそこには何があるのかわからない」

「どうして水路と繋がっている？」

「だから気をつけてね。その階段を登ると地上へ出られる。ここはIDなしで通れるしセキュリティも無い。最も私有地だから村井の研究員や警備隊に見つかれば大変だけどね」

会話をしようとして受信専用だということを思い出した。

虚しく響く佐久間の声。穴は薄暗い。天井から注ぐわずかな光も遙か彼方に思える。

光も音も二オイも全てが薄く佐久間自身が濃く感じられる空間に戸惑いながら階段を登ろうとした足がふいに止まった。

「何かが来るッ」

そう口にした直後、底から這い上がってくるヴァーテの足音が聞こえた。ドンドン、と壁面に爪を突き立てて乱暴に登る八つの長い腕が特徴的なヴァーテ。額には数十個の赤い瞳があり、それぞれが独立して動いていた。

佐久間は身をかがめてやり過ごそうとするが、ヴァーテは佐久間と水平になる位置で急停止する。

「クソッ」

額にある瞳がスロットマシンみたいに全ての視線が佐久間へと注がれた直後、ヴァーテの長い腕は佐久間を捕まえるべく手を伸ばしてくる。

軽いステップで腕を避けながら横目で通りすぎるそれを確認する。薄い茶色の体毛で覆われていて細いわりにしっかりとしている腕で分断は不可能だと判断した。引っ込ませる腕の代わりに別の腕が襲いかかってくる。

壁に掴まる四つの腕以外の四つが繰り返し佐久間を狙って伸びて

くるが全体的に遅いので充分に避けられた。

「仕方ない」

腕の雨をくぐり抜けて階段を走って登る佐久間を追いかけてくるヴァーテ。胴体から伸びる四つの腕で佐久間と併走して壁を登り続けてながら残りの四つの腕で攻撃を仕掛けてきている。

避けながら走るの難しいことではないが問題は通路を塞がれることにある。あの大きな身体で通路に立たれば上へは登れないだろう。

佐久間は少しでもヴァーテよりも高い位置へ居続けようと階段を二つ、三つ飛ばして駆けあがった。

「…このくらいでは離せないかつ」

ヴァーテは様子を探るように佐久間の足取りに合わせて併走を続けていた。伸ばしてくる腕も正確に身体を捉えている。吸血鬼の反応でも避けきれなくなりつつある。

シャツの切れ端が爪に触れた。燃える衣服が真っ黒の灰になるまで数秒。体温が異常に高く、あの爪は抉るというより溶かしているに近い。

「何かと応戦しているみたいだね。すごい熱量だ」

友川の声が聞こえた。

どうすればいいのか、と訊ねようとして辞めた。どうせ聞こえない。

佐久間は階段を強く蹴り壁へと飛翔する。対角にあった壁をまた蹴り上へと一気に登ろうとした。

だが――

「――ッ?！」

ヴァーテの細い腕が佐久間の足首を掴んだ。

研究所

身体を奈落の底へ投げられて落下する視界が歪むほどの重力が肉体を押しつぶしてくる中、ヴァーテが一つずつ爪を外壁から剥がしている姿に警戒していた。

ヴァーテの大柄の身体が揺れて抜いた爪が宙に浮いていたのが次に動く場所が問題だった。上へ登り続けるのならば問題は落下した後待っている足元の暗闇、下へ降りてくるのならば上下両方に対処しなければならぬ。

「来るのかッ…来るなよ…」

佐久間は光を遮るヴァーテのシルエットに祈った。三本目の爪を離れた時にグラリと揺れるヴァーテが体勢を崩したのが見えたと同時に佐久間も身をひるがえしヴァーテよりも速く地面へ辿りつくように身体をのけぞり重心を後ろへ集めた。

加速し続ける肉体。筋肉が軋む音がやけにうるさくて胸を叩く鼓動もそれに続けとばかりに高鳴った。

廃棄場の底は見たことはないが長い間に積み重ねられたヴァーテの腐臭や生き残ったヴァーテの進化が予想出来る。

覚悟を決めると自分に言い聞かして頭を守るように腕を交差させて落下を続ける。地面に叩きつけられることはないが積み上げられたヴァーテの隙間へ入り窒息、圧死することも考えられる。

「何かあったの？ずいぶんと落ちているけど」

のんきな友川の声がマイクから聞こえてくると薄れかけていた意識がまた繋がった。

加速し過ぎて振り返ることも不可能だった。空気が震える音でヴァーテの気配も二オイも音も消えて落下していることさえも信じられなくなる。

薄目を開けて底を探るが闇しか見えてこない。

「とりあえず何かあったとして言うけどその廃棄場は君が今通っているいくつかの細い管のような場所が一箇所に集められるから降りた先には工場施設みたいなのが見えるはずだよ」

半分に割った栗を想像してくれたらいいね、と笑っているが佐久間には余裕は無かった。続けて廃棄場の説明をするが外観ばかりで役に立つ情報はない。

ただ意識を途絶えさせない為にその声に集中する佐久間。闇に針が刺さったような小さな点が見えた。

「もうそろそろ光が見えるはずなんだけどな。廃棄場の最下層にはサイボーグや遠隔ロボットを中心の作業員や研究員が選定作業をしているはずなんだけどね。僕の予想では」

「…見…見えるぞ」

「あ、そっか。話せないんだったね。とにかく光が見える。管を降りるとヴァーテが積み重なっている場所があり、そこからコンベアに乗って分類わけされるはず。それまでに逃げないとまずいことになりそうだよ」

「わかった…ああ…」

半分途切れた意識の中で耳に聞こえる声だけを頼りだった。

細い点だった光が波紋を描くように広がっていく。光の輪の中へ佐久間自身が落ちると数秒間だけ工場らしきコンベア群が見えたがすぐに暗転する。

圧力が全身に加わり、途切れそうだった意識さえも圧縮してくる

痛みで目が覚めた。

「降りたか」

ひどい二オイとヌルツとしたオイルで手や足が滑る。だがそのおかげで身体を隙間から外へと逃せることが容易に出来た。

佐久間は積み上げられたヴァーテの上を歩いていると背後から何かがぶつんと弾ける音が聞こえて振り返る。

ヴァーテの背中へ爪を突き立てて器用に身体を支える八つの腕のあいつが見えた。明るい場所で見ると蜘蛛そのものだった。赤い瞳がまだら模様に見える。

ガスが溜まりすぎた肉体で膨れる四肢を持つヴァーテが破裂し、真っ赤な血しぶきをあげて内臓物が露わになったその上に立つ蜘蛛のヴァーテの額にある瞳がきよろきよろと何かを探している。

「追いかけてばかりだなッ」

佐久間は自らの境遇を自嘲しながら出口を探した。三角を逆さにした先端が細くなり、その下にコンベアがある透明な容器にヴァーテが詰まっている。

その一番上に佐久間はいて十五メートルほどある天井には無数の穴が開いて次々に廃棄されたヴァーテが落ちてきている。

ヴァーテの性質から他と結びついて一体のヴァーテになる過程も研究の対象だと思ったのは左右の壁に見えるカメラの数が異常だったからだ。発泡スチロールみたいに穴ばこの壁。天井までもカメラが仕込まれていた。

「見えるよ。カメラをハッキングして見えているから誘導するね」

「どっちへ逃げればいいッ?！」

「その容器の縁はどれも低くて飛び越えることが出来る。何処でも

いいから外側へ向かって走れるかい？」

「ああ」

半身を振り返り八つの腕のヴァーテの動向を確認しながら走る佐久間。瞳は未だにせわしなく動いている。

「光が強すぎて見失っているんだ」

その声で振り返ることも辞めてヴァーテに背中を向けて縁へと走った。縁までは数十メートル程度。頭上を見て落ちてくる廃棄物に当たらないような位置を選んで走り続けた。

ようやく縁に手が届く場所まで来る。佐久間は縁に手をひっかけ、身体を乗り越えさせた時、振り返る。未だに探し続ける八つ腕のヴァーテを残して佐久間はヴァーテを閉じ込める容器から飛び降りた。

工場機械をクッションにして降りていくとコンベアが止まりエライ音を吐きだし始める。アラートが鳴り響く工場内。作業の手を止めたサイボーグやロボットが戦闘モードへ切り替えて着地したばかりの佐久間を取り囲んだ。

研究所 2

「人間か…」

作業用サイボーグが手をあげると一斉に警戒体勢を解き持ち場へ戻るロボット。アラートも止まり平穏な作業風景へと戻ることが異様だった。

「水路から落ちてきたんだろう？」

「ああ…よくあるのか？」

「ほとんどがヴァーテに潰されて死ぬよ。故障の原因になる。その場合は保険が効かないから困っている。IDを」

サイボーグはIDを求めた。作業中の事故はIDと照合しそれぞれの会社へ賠償金を要求しているとサイボーグは話しながらIDを受け取る。

よほど人に会わないのか、そういう性格をしているのか、サイボーグは嘆くように話を続ける。

「ダンヒアのボディガードか…喧嘩でもしたか？」

サイボーグは口角をクイツとあげる仕草をしたが人間らしさはなく、駆動音も聞こえてきそうだった。

「いいや調査をしていたら下から八つ腕のヴァーテが襲いかかってきた」

「調査？」

「上のあれさ」

「ああ…ヒューケと網羅の奴か」

「そう。あつ…と何か知っているか？」

そう聞くと真っ直ぐに佐久間を見る。一応仕事で情報を集めていると答えると間髪を置かないでため息を吐くサイボーグ。

「仕事は手を抜け。会社に身を捧げてても何の意味もない」

「ありがとう。心に留めておく」

「そうしてくれ。そうでないと俺みたいになる」

自虐的にそう言うときサイボーグはまた口角をあげた。

このサイボーグは佐久間と同じ生きるために人間らしさを捧げた最も人間らしい人間のように佐久間のことを親身に言っているのが伝わる。

単なる世話好きなおじさんなのかもしれないが、これは助かったと佐久間はわき腹を押さえてサイボーグへ寄りかかった。

「傷口を開いたらしい」

爪を押しこんで傷口を作る佐久間。顔を歪めるとサイボーグは大丈夫か、と肩を支えてくる。

「心配ない。俺も吸血鬼だからすぐに治る。だがすぐには厳しい…どこか休める場所を教えてくださいませんか？」

「機械用の交換部品しか無い。医務室へ行くならば階段を登ればすぐにある。送らせよう」

「悪いな」

サイボーグが一体のロボットを呼んで佐久間を渡した。ロボットはお腹にあったネットを広げて佐久間を入れた。カンガルーみたい

に間抜けだが確実に運搬出来る賢い方法だと言える。

「医務室へ頼む」

目を光らせて了解の意思を示すロボットは床を滑るように医務室へと続く階段へと佐久間を連れていった。

研究所3

「医務室……？」

佐久間は医務室とは連想しがたい殺風景な部屋に通される。ロボットはネットから降りると指示してくるのに従うとその場でくると旋回し元の作業場へと戻った。

ガタン、ガタン、と乱暴に階段を降りるロボットの音が響く室内を見渡すと乱暴に置かれた部品類が多く見られる。

「本当に機械用しか無い」

サイボーグが言った通りにここには機械部品ばかりが置いてある。佐久間は近くにあった部品を手にとった。

「古いな。応急処置用の回路もある。動けばいいってことか」

「——くま——聞こえ——さ——ッ」

「音……？」

佐久間は足元から聞こえる音に意識を傾ける。手に取った部品を捨てて音の鳴る方へ慎重に歩いた。

音は大型の部品が乱雑に積み上げられた奥から聞こえてくる。佐久間は手をねじ込んで音の鳴る何かを掴んだ。

ヘッドフォン付きマイクだ。

「友川か？」

「ああようやく聞こえたかい？ 苦労したんだよ」

「こつちも色々あった。これで話が出来るようになった。さっそくで悪いがここは何処だ？」

「村井研究所だよ」

「ずいぶん古い機械がゴロゴロあるように見える」

「そりゃ昔は名のあつた研究機関だったけど今は廃品を再生するのとで何とか延命している落ちぶれた研究機関だからね」

佐久間はマイクの位置を調整しながら部屋の中を歩き回る。他に
使えそうな、たとえば武器なんかがあれば頼もしい。あのヴァーテ
に対抗出来るほどの武器は期待できないが特殊警棒クラスの武器な
らありそうだ。

「画面は開けるタイプのフォンかい？」

「いいや。音声通信のみだ」

「そうか……残念。仕方ないね」

面倒そうにため息を吐く友川。佐久間は手に代用できる部品も候
補に入れたが医務室という名前だけあって回路や冷却ファンなどが
応急処置が中心の倉庫だった。

「まず今いる位置から廊下へ出て階段を上へ」

「……」

武器は諦めて指示に従う佐久間は医務室を出て登ってきた階段を
さらに登ることとした。

研究所 4

階段を登り続けた。道中に通路を通り反対側にある階段へ歩いたが、その通路から見える多くの小さな部屋に明かりも人の気配もない。

廃墟のような空気はないので人の出入りは頻繁でないにしろあると言えた。さきほどのサイボーグが見回りでもしているのか、と佐久間は思いながら警戒するように目を細める。

足音を殺して移動することには問題はないが、フォンから洩れる友川の声とノイズ音がうるさく響いた。

「ヴァーテの気配や人の気配は探れるのか？」

「ある程度は……まあ無理だとも言いたいけど僕の才能じゃ不可能は無いんだよね」

友川は話を続けるほどに自慢を入れてくる。愚痴っぽい口調で自分の賛歌を終えた後にしっかりと説明を入れてくる辺りプロではあり、その能力に偽りはない。信用しても良さそうだ。

「次は右に曲がって……それでからしばらく一本道」

「何かいるのか？」

「このフロアにも人もロボットもヴァーテもいないね」

「無人か？」

「そうだといいんだけどね。まあ……趣味の悪い村井さんって言われていた偏屈じじいだから」

「トラップでもあるのか？」

「そんなまどろっこしい人じゃないとだけ言っておこう。たぶん吸血鬼が落ちてきたって連絡が来ているからね」

友川はうつんとうなって頭を掻く音が聞こえた。

「村井って人が待ち伏せているのか？」

「村井ってのはヴァーテの適合や遺伝結合なんかを調べて合成データを作っていたんだよ。何と何を組み合わせるとどうなるかってことね」

「あの八つの腕のヴァーテも……？」

「多分、強制結合とか薬物投与による意識の混濁条件下の統合とかそういうのかもしれないね。専門外だから何とも言えないけどどの業界でも狂ったじいさんだって言われているよ」

「だったら合成したヴァーテが待っているのが見えるのか？」

「そうだと思う。膨大の熱量があつて演習場へ登る大部屋を陣取っているから試したいんだよ。最高のヴァーテを作るつてのがこの研究所の目的だから……そんなだから資産家が逃げるんだけどね。適当にヴァーテの性質を見極めて処理するのに最適な条件・道具を開発を支援するとかいう名目で開業したら良かったのに」

「避けられないのか？」

「他の道は無いね。結局はその大部屋を通るしかない。蜘蛛の糸にでも引っ掛かったと思うしかないかもね」

佐久間は通り過ぎていただけの部屋に目を配るようになった。戦闘になるのにも武器が必要だった。それも一撃で決められるような武器がいい。当てて逃げられる時間を稼ぐだけの閃光弾なんかがあれば最高だが、と思った。

「生身では勝てる気がしない。逃げるにもヴァーテを攪乱^{かくらん}する武器が欲しい」

「研究所……だからね」

「八つ腕のヴァーテですら勝つのは難しいだろう。正直に言つてど

こちらの方が強い？」

「さっきのなんて生ぬるくらい今回は自信作なんだろうね。あ、ちなみに出口もハッキング出来ないからヴァーテの命が鍵となっているからどっちも倒すしかない」

「機械なら何とか出来るんじゃないのか？」

「生体系はね……ランダムナンバーとかデータの書き換えとかは意味がないからね。命を奪えば扉が開く。シンプルだがいい案だと思う。ハッキング防止の観点から見て、だけどね」

「戦いは避けられないということか……」

勝てるのか、と自答する声に沈黙する胸は穏やかに鼓動を刻んでいる。緊張や不安はない。ただそれと結果は別の問題だ。

「もしも村井が室内に入れば村井を盾に出られるともあり得ないか？」

「無いね。村井は近くの部屋でモニター監視だよ」

「その部屋に先に行くのは？」

「ロックを解除する時間がない。僕らの目的はここを出ることじゃないことはわかるよね？」

「……ああ。カスミの奪還と妹の無事を確認したい」

「だったらつべこべ言わずにヴァーテを倒すことだけを考えてくれよ。信じているからね。僕は勝つこと前提で作戦を考えているんだからね」

「……ああ」

佐久間の脳裏には妹の顔とカスミの顔が浮かんだ。

「扉が見える」

「くぐれば大部屋だ。幸運を祈る」

四階しか無かったフロアの最上階。階段を登り終えたすぐ目の前に何の変哲もない扉があった。施錠していない扉に触れると扉は自動で左側に流れて人工的な光が佐久間の全身を迎え入れた。

研究所 5

人の手で作られた白い光が降り注ぐ室内は病的なほどに清潔だった。

乳白色の女がいて腰を浮かせてつま先を交差させる不自然な姿で座っていた。

「これはこれは珍しい」

しわがれた声が室内に響く。明らかに異質な声は清潔感に狂気を浮かび上がらせる。

「それに背後にいる友川教授とも久しい。話がしたい」

「僕には話はない。どうせ話をしたって通してもらえないんだろう？」

「わかつているじゃないかツふふふ」

「だったらさつさとやってくれ。僕らにも時間は無いんだよ」

フォンからではなく、室内のスピーカーから友川の声が聞こえてくる。その声にノスタルジックな感情を含んだ笑みを浮かべる村井だと思われる声。

「急ごうとも時間の流れは変わらない。このまま逃げ続けて時間切れということも出来るが」

「やらないよ。あんたは吸血鬼を見ても自分の好奇心を抑えられる人間じゃない」

「いつもは人間やジャンク寸前のサイボーグばかりだ。私の『ハクビジン』も寂しがつている」

「ハクビジンね……絶望的なネーミングセンスだよ」

「ふはははッ何とでも言えばいい」

男の膨らむ自信に友川はすっかり呆れている。二人は知り合いのようだ。佐久間は真っ直ぐにハクビジンを見て構えるが、うつすらと唇を歪めて不器用に笑うハクビジンは可愛げに首を傾げる。

サイボーグを思い出した笑み。機械的な動きに違和感があった。

「最高の遺伝子を組んで作られた最高傑作。いつか世に出るヴァーテが美しくなくてどうする？」

「世界中をこいつで埋めようっていうの？」

「その通り。もう一度……このハクビジンで世界最高の研究機関へ戻る。そして人類は新たな世界へ導く」

「夢だけは壮大ってね……佐久間ッ。急いでね」

通信をぶった切る音をわざわざ立てて友川の声は消えた。

同時に男の音声も切れるとハクビジンはその姿勢のままに佐久間の目線と同じ高さまで浮かんだ。

研究所 6

カカカカ……クキツ

と機械的に首をひねって首が折れた。

蓋を開けたとわかったのは細く関節が丸い玉で繋がれた昆虫に似た腕が見えたからだ。

「本体か……」

ハクビジンから影が飛びあがり、外殻だった女の子はバサッとその場で落ちた。

真っ白い影は光に照らされて姿を消すが超感覚がある佐久間には音で場所がわかった。部屋中の壁を走って攻撃のチャンスをつかっているが佐久間から放たれる氣に手を出せずに外殻の手前で着地する。

甲羅を背負った昆虫。頭の禍々しい角の先端に丸い穴があつてそこから何かを噴出している。

「白い粉……姿をさらに消そうというのか」

白い粉が噴出し、頭上からの光が乱反射してヴァーテの姿が消えた。

佐久間はグツと爪をせり出して自らもその氣配を追いかけた。突如追いかけてくる氣配にヴァーテは応戦をしようと身構えるが佐久間の一撃が胴体を貫く。

滴り落ちる白い液体。ヴァーテから手を抜いてその亡骸を投げ捨てた。

「本体は女か……それとも何処かに隠れていたのか？」

シルエットが見えた。

人型のシルエットが悠然と歩いてくる。

「——ッ！速いッ」

シルエットがいつの間にか眼前であの女性になり、佐久間との距離を0に詰める。女と共に後方へ飛んで勢いを殺そうとするが背中には壁があつて女の拳が佐久間の胴体にめり込んだ。

佐久間はとつさに女の首を掴んで反対側にねじり投げたが手には何の感触もない。女は自らの意思で飛んだことがわかる。

「何度も同じ手はッ」

シルエットが見えてそれが歩いてくる。今度は自らシルエットへ駆けよつて先制攻撃を仕掛けようとするが女との距離が埋まらない。足を止めても距離は一定だった。まるで別の次元にいるように距離感を失っていく。

「クッ」

背中からの一撃。シルエットは騙しか。

よろける佐久間は振り返る。そこにはまた同じシルエットがあつた。身体の角度を変えて全方位を見るが、どの角度を見ても佐久間へ向かつて歩くシルエットが見えた。

研究所7

「友川ッどういうことだ？」

「――」

「聞こえない!!」

「――」

ノイズで邪魔されて声が聞こえなくなった。白い霧はジャミング効果もあるようだ。

歩いてくるシルエットの一つへと突っ込んで走り続けた。壁に触れるとそこで振り返り構えた。だが、攻撃は仕掛けられてこない。

「気配は一つ……光が拡散させているのだろう」

情報を整理して気配だけを追う佐久間。足音も一つ。呼吸も一つ。

「時間もどのくらい経った？ まだ……それほどはかかっていないはずだが」

迷いが焦りを生む。

ジリジリと汗が全身から吹き出るのも人工灯のせいだ。思っているよりも強い光が体力を奪っていく。人間ならばもう立っている気力さえもないだろう。

「……時間がないッ」

佐久間は壁を蹴って天井へ向かって飛んだ。

人工灯を掴んだ手が燃えるように痛んだが奥歯を噛んで我慢し、

長細い人工灯を引きちぎる。着地してからそれを二つに割って頭上へと投げた。

ガシャン

遠くで落ちる人工灯の音を確認して佐久間はまた壁を蹴り天井を目がけた。

爛れた掌で握る人工灯を天井へ投げ続けることを続けているとシルエツトは縮小していく。さらに動きがあったのは適当に投げた人工灯を避けた姿が見えた時だ。

「そこかッ!!」

佐久間は人工灯の着地して割れる音を頼りに走った。

近くに気配を感じて手を伸ばすと何かに触れた。だが、掌に小さな痛みが走るとそれは全身に駆け巡り少しだけ動けなくなった。膝から崩れる佐久間に近づくシルエツト。その手には自らのもう片方の手を握ったハクビジンの姿があった。

「この子は……要らない」

ハクビジンはそう言っ腕を棒のように扱って佐久間の頭上から殴りおろしてくる。

神経に電流が残っていたのか、脳の命令が正常に機能せずに当たるとわかっていながら避けられずに腕を頭の上で構えた右腕で防御する。

軽い腕。蝋燭で出来た腕のようにあっさりと折れて粉々になって散らばった。

「——ッ」

粉々になった腕が足元で動いて佐久間の身体へ付着してくる。
それがすうーっと身体の中へ入ってくる奇妙な感覚があつて寒気がした。人格ほどの形成されたモノではない意思を感じる。

ハクビジンの失っていた腕から新たな腕が生えたとハクビジンは良かった、と呟いてまた霧の中へ消えていった。

「何だ……何なんだ……」

ヴァーテは集合体だと知っている。不要な命を捨てたようには見えない。腕が佐久間の身体へ入って安堵した顔からは逃げ出せて良かった、と言うようなニュアンスに思える。

その答えに賛同するかのように別の意思が胸をドクン、と高鳴らせる。

「ヴァーテの結合が俺に……？ どうして」

吸血鬼がヴァーテになる条件は多くあるが大半の場合は拒絶反応からだ。

拒絶よりも適合し過ぎることが問題だった佐久間がヴァーテになるとは考えにくい。

「エスケープホールドか……？」

死に瀕した精神が最期に抛り所と借りることをエスケープホールドという。ヴァーテを処理した後に現場を封鎖する理由がこれだった。寄生された吸血鬼がヴァーテになった例も少なくはない。

多くの場合は問題ないのだが怨念の類が強い場合は例外的に生きている精神を凌駕する^{りょうが}こともある。

「だが……強い意思は感じない」

強烈な怨念はささいなきっかけで爆発する可能性があるだけに慎重に立ち上がる。恋愛の恨みだと異性を見た刹那に爆発する例が多い。

しびれがあつた身体も治つて自由に動かせる四肢を確かめる佐久間にハクビジンがまた襲いかかってくる。

「またか……」

手に持った腕を構えて振りあげる姿にそつつぶやいた佐久間は避けずに腕を掴んだ。

だが、耐久力のない腕は触れた衝撃で粉々になって足元へ散つた。

「ヒビがある……ヒビが……誰かが逃がそうとしているのか？」

散つた粉がまた佐久間へと流入してくるのも気にせずにハクビジンの顔を見た。ハクビジンの頬には亀裂があつて耳の付け根まで続く長いヒビがある顔には安堵した表情があつた。

「だが多くを受け入れると俺もヴァーテになる。それは出来ない」

佐久間は身体にいる何かにそう告げると胸のざわめきが小さくなつた。

またシルエットが歩いてくるのが見えて今度は応戦する構えとなつた佐久間が爪を立てた。

「——たす——ッ——け……」

胴体を貫く佐久間の腕。ハクビジンは貫かれた腕にしがついて

そう言った。

何だ、と思った時にはすでに遅くハクビジンの内部から膨れ上がる熱量が光となってヒビから洩れていた。

研究所 8

腕を抜いた直後、衝撃破が全身を強く弾き飛ばした。周囲にあった霧も弾かれて天井の人工灯も全て割れた。

暗闇にいるのはハクビジンの中身。狂ったような熱量を放出してもなお、膨大な熱量を持ち、自らの肉体を発光させている。

佐久間の驚異的な回復力をしてもしち上がることにさえ難しい。爆発にやられた細胞の多くに再生が追いつかないでいた。身体の半分は焼け焦げてジューっと煙が立っていた。

「勝手なことをする女だ」

ハクビジンの声は低い男の声だった。中にいた女の意味が佐久間の身体へ逃がしていたのだといまさらに気付いた。

闇にうごめく発光する姿は神話のゴーレムに似ていた。四角いシルエットに胸がざわついた。

「強い女は嫌いじゃない。見た目も飾っていると楽に殺せる。だが、力を逃がしているのはいただけじゃないな……返してもらおうか」

「こっちの方が俺も楽でいい」

「力に自信があるようだがッ。吸血鬼といっても一つの意味、一つの肉体しか持たない不完全な個体」

「集合体なのに一つの意味が支配しているか。それとも集合体を作り出した空想の意味か」

「どっちでも構うまい。逃げようとする意思が作り出した強者か、ただの強者か。どちらにせよ強者に違いない」

「傲慢だな。弱者は語りたがる」

「面白いッ実に面白くなる」

ハクビジンが足を踏む度に地鳴りがする。巨大な腕が伸びてくるのを避けた。

「何だッ」

宙に避けたはずの佐久間が制止している。

動くことも出来ずに宙へ浮かぶ身体へとゆっくりと腕を戻したハクビジンがもう一度、殴りかかった。

全身を叩きつけられる衝撃。圧倒的な痛み。筋肉が千切れる音や骨が折れる音が全身を駆けめぐりながら肉体はフロアへ投げ出された。

再生を始める音を聞いてハクビジンは大げさに笑った。

「死なない不幸を呪うがいい」

「不死ではない。だが死ぬつもりもない」

驚異的な再生を終えてすぐに避けた。少し前までいた場所へはハクビジンの腕がハンマーのように振り下ろされていた。

「力場か……」

暗闇に見える微量の電流が火花を散らしている姿が見えてそう確信した。

身体の周辺を電流が流れて力場を形成しているので近づけない。

「——ッ」

カチッと足元の破片を踏んだ佐久間。

割れた人工灯か……と思った。人工灯を拾い上げてハクビジンへ

投げる佐久間。

「全く効かな」

「どうかな？」

人工灯と共に電池類や装置関連も次々と投げて力場を乱す佐久間。
ハクビジンの身体には電池類が付着していく。

「これで対等とでも言いたいのか？ 面白い」

「ああ悪いがお前はただの木偶だ」

「ふんッ」

力場の消失を確認するが、エネルギーが減ったわけではない。完全
にブラフだ。

佐久間はそれでも策があるように笑ってみせた。

研究所 9

「うおりゃああああ」

雄たけびをあげてハクビジンはその場で拳を振り下ろす。ズシン、と重い衝撃が足に伝わってフロア全体が揺れているように感じた。

「この力。まさしく強さ」

「自慢もしたくなる。だが当ててから言ってもいいんじゃないか？」

「

「一撃で仕留めるのだから先に言わないと聞けない」

「残念だ」

佐久間は低い体勢を維持しながらハクビジンに駆け寄る。

のっそりとした動きで佐久間に身体の向きを合わせようとするハクビジンの視界から消えた。

「背後に回るかッ」

ハクビジンが背後の足音を追いかけようと旋回するが佐久間の姿は見えない。ただ旋回の数度に合わせて背後へと回り続けていた。

「時間稼ぎをしてもどうなるものでもない」

ふいに足を止めるハクビジンは胡坐をかいて座り始めた。腕を組んで観念したかのように目を閉じたのが不気味だった。

佐久間も背後で足を止めている。広い背中に一撃をくわえようとおもつといくらでも可能だ。

「力場が消えて……抑え込んでいた意思が減ろうと言うのか」

「何を言っている。来いッ」

「電流のせいかな。こいつが話せていたのも」

「何を×××いつ××」

「所詮集合体。脆さを抱えた不完全な身体」

「×××」

ハクビジンは自らの首を絞めてもがいている。その背中にはあの女性の姿が浮き出て両腕を操って首を締めさせているのがわかる。

「崩壊が始まる」

亀裂が入る背中から洩れる白い液体。どろり、とした液体はやや這いずって力尽きる。

山のように肩幅が広い背中が縮小を続け、足元には白い液体が飛び散った。それらは放射線状に逃げてはすぐに力尽きた。佐久間の足元から数メートルの位置にも力尽きた液体が床のシミになりつつあるのが見える。

「だから村井研究所は滅びたんだよ」

「ぬぬ……」

「焦り過ぎた。完璧を求め過ぎた。全てはもう終わったんだよ」

「こんなありさまッ」

「……佐久間ッ。エネルギーの消失を確認次第、扉を抜けて上へ行く」

フロアに響く声。村井と友川の声が対照的に続いた。村井の怒号と共に崩れるハクビジンはシャボン玉に似た儚さを持って消滅していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3374w/>

沈黙のサーバント

2011年11月29日15時51分発行